

資の係であつたため、必要となれば、相手が将校さんでもありますから豊富に物資を手に入れることができ、その点では、全く、不自由することはありませんでした。

戦争とはいっても、十九年の十月十日以来それといつたはげしい空襲もなく、そんなに不安のない日々を送っていました。

二十年、三月二十三日、翌日の卒業式に備えて事務所でガリ刷りの仕事があつたため出勤していると、何かやに飛行機が飛びました。ところが午前十一時を過ぎた頃、突然、低空と共にすごい射撃に見舞われたため、みんな大きさわざしてしまい、それが止むまでは近くに掘つてあった事務所の壕に避難することになりました。避難していながら、家族の事が気になり、「親子別々に死んでいくのか」とばかり思つていました。

やつと日が暮れて空襲も下火になつた頃、それとばかりに壕を飛びだして我が家へ戻つてみると、家はほとんどこわされてしまい、みんな山へ避難したらしくだれ一人残つているものはいません。何を考えたのか、家族が避難している山へ行く氣はせず、部落内をただ、プラプラと歩き回つてみました。

所々、瓦礫が散らばり、人一人と歩くようすがありません。歩き続けていると山の方の壕へたどりつきました。その壕に避難していた人々は、全員爆風にやられ、ずいぶん死傷者を出していました。その中に健ちゃんという子が腹をやられ死んでいたため、私はその子を抱いて遺体を家へ届けてきました。再び壕へ戻つてみると助役さんがいたので、いろいろ事情を聞かせてもらいました。そし

しばらくして、私達が避難している壕は立ちのきを命ぜられたため、産業組合の壕へ行くことになりました。

産業組合の壕はさいしょ、帳簿や食糧がたくさん保管されていましたため、特に公職以外の人ははいれませんでしたが、連れの老父母や子供たちがかわいそうなので、家族をつれてそこに避難しました。私達だけでなく、いざとなると帳簿や食糧をすみに片づけて大せいの人がはいつてきました。

二十三日から始まつた戦闘は相変わらず衰えることなく、二十五

日晚の「全員自決するから忠魂碑の前に集まるよ」連絡を受けた頃

などは、艦砲射撃が激しく島全体を揺るがしている感じです。「このような激しい戦闘では生きる望みもないから」ということで、命令を受けると、みんなは一張らの服を取り出して身仕度を整えました。

私の主人は戦争前に亡くなつていたため、忠魂碑に向かう前に子供たちに、

「死んだらお父さんに会えるから、一緒にお父さんの所へ行こうね。」

と言ふと、子供たちは目を輝かせて、いじらしくもうなづいてくれました。

私はきれいな服も何もないでの、そのままの恰好で帳簿と現金をもつて娘をおぶり、父と母は上の二人の子の手をひいて、私の家族が先に壕を出て行きました。

阿佐道の方に出てみると、艦砲射撃が激しいので、私達は伏せながら歩き続け、やつと忠魂碑前にたどりつきました。しかし、そこには私の家族の他に、校長先生とその奥さん、それに別の一家庭い

て二人で学校の方の状況を伺いに行ってみますと、爆風で大ヶガした人や、死人までいるのでかたづけてまわりました。その時、水谷少尉という方が私の行動を見て、

「おツルさん、（当時、私の名前はツルとよばれていたため、水谷少尉はいつも、おツルさんといつていきました。）あなたは戦争が終わつたら勲章がもらえるよ。頑張りなさいよ、おツルさん」と言つて去つてきました。

片づけが済んで、私の家の宿泊している将校の長谷川さんが、爆風でケガをしているという事を耳にしたので、何かかわいそうになります。その人を夢中でさがしていると、私の近くに爆弾が落ちたため、いそいで通信隊の壕の中に逃げこみました。その時からは激しい空襲で、長谷川さんをさがしに歩き回ることなんてとうていできません。ところがしばらくして気がついてみると何とその壕の中にさが歩いていた長谷川さんがはいつていています。やはり大ヶガをしていました。

少し空襲が止んだと思った頃、「今だ」ということでケガした長谷川さんを同僚がかつぎ、私はひきずつている足をささえて医務室の壕に向かいました。逆方向からは敵機の米襲があるため、かくれては歩きのくり返しをしながらやつと医務室にたどりつくことができました。

長谷川さんを無事医務室まで迎んで安心した頃、両親や我が子の安否が気になり出したため、それからは山へ家族をさがしに行きました。やつとさがしあてて胸をなでおろすや否や、父にさんざん叱られるはめになつてしましました。

るだけで他にだれも見当りません。死にに来たつもりのものが、人が少ないのと、まつ赤な火が近くを飛んで行くのとで不安を覚え、死ぬのがこわくなつてきました。

ほんとに不思議なものです。「死」そのものは何もこわくないのです。けれども、自分たちだけ弾にあたつて「死ぬ」という事と、みんなと一緒に自ら手を下して「死ぬ」という事とは、言葉の上で同じ「死」を意味しても、気持ちの上では全く別のものでした。その気持はうまく言えません。

結局、逃げようとして、産業組合の壕にひき返してきました。

ところが、私達が戻つて来た時にはすでに組合の壕は閉じられて内鍵がかかり、はいれなくなつていていたのです。先程まできれいに身仕度を整えていた人たちとは、私の家族以外、だれ一人出てきていません。しようがないので、どうせ死ぬのに変わりないからと、ちょうど向かいにあつていた壕を死に場所に決めることにしました。

さて、いざその壕へはいろいろとした時、父がいなごとに気がつきました。あまり、足が丈夫ではないので歩くのが遅くてどこかではぐれたのでしょう。しばらくは心配で待つていましたが、しまいにはもう自分たちも死ぬだからどうでもよいという気持になりました。私はその半間から、持つていた荷物を中に押しやり、母と子供たちは奥に、私は入口の方に横たわつていました。寝つかれないままにじつと身を横たえていると、突然、轟が動き出したのです。

壕の入口には古壁が立てられていて、半間ほどは開けられています。私はその半間から、持つていた荷物を中に押しやり、母と子供たちは奥に、私は入口の方に横たわつていました。寝つかれないままにじつと身を横たえていると、突然、轟が動き出したのです。

人の姿は見えないのに、ゆっくりと止まつては動きと、再三同じ行動を繰り返されました。

また、外に於いては機関銃の音がしたり話し声が聞こえるので、朝鮮人か友軍が応援にかけつけたのだろうと思いました。しかし、やはり安心できません。緊張し続けていると壘の間から、中の方へいきなり手りゅう弾ふうなものが投げ込まれ、私の足元で爆発しましたが自分の事より母や子供たちの事が気になり、破裂音と共に反射的に母や子供たちの名を呼んだのです。幸い、私はズックをはいていたため、また、あまり多くは投げこまれなかつたため、だれもケガすることはありませんでした。その壘は私の家族だけとばかり思つていたら、爆発音を聞いて奥の方から二、三の家族も出てきました。もう、壘の中の人たちも安心してはおれない表情です。おまけに、動き続けている壘も、やむ様子がありません。私は、最初は不思議だ、不思議だとばかり思つてましたが、外に出て、確かめなければ気が済みません。思い切つてとび出してみました。

何とマア、外には米兵が壘の前から山のあたりまでずらつと並んで立つてゐるのです。壘が動いていたのは、彼らが壘の中を確めるつもりだったのでしょうか。

大せいの外人を前にして私は何を思つたのか急いで米兵の方にかけより、「兵隊さん、こんにちは」とあいさつをしたのです。そして手まね、足まねで、

「兵隊さん、私達はどうせ死ぬ身ですから、私達だけここで死ぬよ」  
りは、向こうの方の壘にはたくさん的人がいますので、みんなと一緒に食いました。

私は校長先生に、

「先生はみんなが死ぬのを見届けてから死ぬようにして下さい。」  
ると校長先生は快く引受けってくれ、身仕度を整えるよういつづけました。

「天皇陛下バンザイ」をみんなで唱え、「死ぬ気持を惜しまないでりっぱに死んでいきましょう」

と言つてから、一人の年輩の女の先生が、だれかに当たるだろうとめくらめっぽうに手りゅう弾を投げつけました。その中の二コが一人の若い女の先生と女の子にあたり、先生は即死で、女の子は重傷を負いました。

私は校長先生に、

「先生はみんなが死ぬのを見届けてから死ぬようにして下さい。」  
と頼んでから、みんながのどがかわいたといふので、壘の前を流れている川へ洗面器や、やかんをもつて水をくみに行きました。

外では月が壘の中の悲劇を無視するかの如くこうと照り、その光りで米兵が鉄帽をかぶつて立つている様子がはつきり伺えます。

水をくんで壘に戻ると、重傷を負つた女の子が、

「おばさん、苦しいよ、水、水……」

と水を要求してきました。傷口からは息がもれて、非常に苦しそうです。その子とかかわっている最中、突然、校長先生が、奥さんの首を切り始めました。すると奥さんの方は切られながらも、

「お父さん、まだですよ。もう少しですよ」

と言つてゐます。

そこら一帯は血がとびちらり、帳簿などにも血がべつとりとくつつ

緒に死なせて下さい。みんなの所に案内しますから、さあ、ついてきて下さい」

言葉の相違なんて念頭にないものですから、夢中でゼスチャーたっぷりに語りかけると、一人の米兵が流ちょうな日本語で、「おばさん、心配するな。」

と言つてくれたので、何か、親しみがわいてくるようでした。彼らとのやりとりに一生懸命になつて、母や子供たちの事をすっかり忘れていた頃、壘の中にかくれていた一人の婦人が私のそばからスッとでてきて別の方の壘へと逃げて行きました。それに釣られて母や子供たちも婦人の後を追つて走つていたため、「一人残されては……」と米兵たちをそっちのけに、私も後を追つて行きました。

やつとたどりついた壘の入口に、今度は、一人の日本兵が倒れていたので最初に逃げた婦人が、

「ここに人が死んでいる」

というのでびっくりしてしまい、今来た道をさらにひき返したため私達もその後を追つて内川の壘の方へ走り出しました。前に、内川の壘に手りゅう弾を持つている人がいると聞いていたので、とつさにひらめいての行動でした。その壘の中には校長先生はじめ、学校の職員がはいついていたので一緒に入れてもらうことにしました。

そこで、私の姉が校長先生に向かつて、「先生、たくさんのお父さんが上陸してきました。産業組合の壘ではみんな自決しています」

と言つたので、もう、みんなびっくりした表情です。

きました。

校長先生は奥さんの首を切り終えると、先程最後に死んでくれるようお願いしたにも拘らず、今度は自らの首を切つたため、「シューッ」と血の出る音と同時に倒れてしましました。私達はびっくりして校長先生の名前を呼び続けましたが、もう何の反応もありません。私の着ている服は返り血をあびて、まつ赤に染まつてしましました。

未すいに終わつた奥さんは私に、「お父さんのそばに寝かせて手をくませて下さい」

だとか、「もし私が死んだら、故郷（佐敷村）に連れて行って下さい」  
だとか、後々の事を要求してきました。

最後には、重傷の女の子も息をひきとりました。

二、三の家族は死ぬのがこわいということで別の壘へ行つてしまましたが、私達や残つた家族は最後まで死ぬ覚悟で、いつまでも壘の中にいました。

さて、どのようにして死んだらいいものかと、武器を調べてみると、手りゅう弾一コとカミソリしかありません。手りゅう弾では失敗するかも知れないと、年輩の女の先生は、カミソリを取り出して

自分の子供たちの首を切り、最後に自分の首をきりましたが、みんな未遂に終わりました。私はそれを見てかわいそうになりました、「どうせ死んでしまうんだから」と水をくんできて与えようとしたが飲みたがる様子もありませんでした。

私達のいた壘は入口が二つになり、中の方で一つになつてゐたた

め、米兵をどまかす意味である作戦を考え出しました。つまり、二つの入口のそれぞれに、自決ですでに息をひきとった人を一人ずつ出して横たえ、「中の人間はすでにみんな死んでしまった」と米兵に思わせようという、今から考えれば、ほんとに単純な考えなのです。ところが、実行に移ろうか、どうしようかという所へ、父が私や子供たちの名を呼びながらやつて来ました。「これは大変な事になつた」と思い、しばらくは返事をしてやらなかつたので、父はさかんに呼び続けています。あまりにもただならぬ様子なので、声のする方へ出てみると何とうしろにたくさんの米兵を従えて来ているではありませんか。今まで行方をくらましていたのは、どうやら祖先に米兵につかまつっていたようです。父は子供たちを連れて出てくるように言つて、私は断わりました。すると

「役所の人や村の人たちはみんな出でてきた。お菓子やたばこ、毛布もたくさんある。ここで子供たちを飢えさせないで早く連れてきなさい」

と言うのに対して、私はさざに断わり続けると、  
「お前はいいから子供たちだけは出しなさい」と言う。  
私は父が言つていることがほんとかどうか確めたくて、一応中にいる人たちに断わつてから役所まで見に行くことにしました。

米兵につきをわれて通りを歩いていると、カメラを向けている人がいるのに、機関銃を向けているのと間違てびっくりしました。役所に着いてみるとなるほど、村民はみんな集まっています。それを確認した後、帰ろうとした所へ米兵が、ケガをした人がいるかどうかたずねてきました。私が「いる」と答えると、その状況をいろいろ

渡嘉敷村の人たちは、鍼や、ナタを使って自決を計つたらしく、体の一部分に鍼のたてられた跡が残つてゐる人もいます。私は後から運ばれてきた患者に対しても、外人から食物をもらつてきて与えたり、水や、さがしてきたカツオ節などを与えたりしました。しばらくしてから、伊江島からもたくさんの病人が運ばれてきました。私の忙しさは、さらに輪をかけられる状態になりました。

渡嘉敷から来た重体患者の中に、一家玉砕し、一人だけ未遂に終わり、米兵に救われた女の子が運ばれてきていました。名前は房子と呼ばれていました。

房子はあまりにも残酷な父母の玉砕を見せつけられたため、米兵に対してひどい敵がい心を持ち、その上、生きる気力を全く失つていました。私はその子がかわいそうに思えてならないので、ずっとつきつきりで看病していましたが、顔色は悪く、食事を与えれば、すべて吐き出してしまうといった始末でした。

その日の晩は大雨が降つたため、「自分の家族はこの大雨でみんな流されてしまうに違ひない」と房子は家族の事が気がかりらしく泣き通しでした。精神的な負担も重なつたせいか、彼女の片肺は内出血がひどく、手術を受けなければ三日ともたないという状態になつてしましました。そして、その頃からは呼吸も正常ではなく、酸素ボンベを使用していました。

通訳を通して房子を手術室に連れてくるよう言われたため、すかして連れて行こうとするのですが、「死んだ方がいい」の一点ばかりで言う事を聞いてくれません。

「あなたが死ぬのだったら私も一緒に死んであげるから」とやつと

いろ聞かしてくれるよう言われたので、ありのままのことを話しました。話しあると米兵は急いでタンカを持ち出して來たのです。

私は、壕の中にいる人たちをみんな出さざるを得ない立場になつてしましました。しようがないので、壕に引き返すと、さつそく中にはいっている人達に、「みんな捕虜になつてしまつた。私達も一緒に出て行きましょう」と説つたが、

「いやだ」とだけしか答えてくれません。

未遂で終つた校長先生の奥さんは「私はお父さんの後を追つて死ぬのです。どんな事があつても絶対出て行きません」というので私は、

「どうせ私達も生き延びようとは思つていません。出でから一緒に死にましょう」

と説得した上で、やつと壕から連れ出して病院へ行きました。病院とはいっても、焼け残つた家を使用したもののです。

その奥さんは、校長先生を失なつてからは身内がいないため、一切、私が面倒を見なければいけなくなつてしましました。その上、若い女性が少ないため、看護婦の仕事まで引き受けなければいけません。幸い、私の家族は役所に収容されていましたので別に手をやくほ

どでもなく、私は与えられた仕事に専念することができました。普通でも忙しさに追われているにもかかわらず、校長先生の奥さんの病状が悪化したことと、さらに座間味村の多くの病人の他、渡嘉敷村や阿波連部落からも次々病人が運ばれて來るので、目の回るほどの忙しさです。

すかすことができ、手術を受けさせました。

手術室には、一緒に入れてもらつて立ち会う事にしました。

手術する時、まず最初に背中の方にメスを入れると、突然、内部にたまつていた膿が、ビューッとふき出し、手術を担当していた医者の顔にまともにかかるてしまいました。ところが、何一ついやな顔せず、今度は、切口からゴム管を通して、膿が外に出るしかけをしました。医学の発達ぶりには、目をみはることばかりでした。

その後、入院中は、ずっと房子につきつきりで、我が子同様の事としてめんどうをみてやりました。

捕虜となつて座間味部落で生活していた住民は、阿佐部落と阿眞部落の二か所に分かれて生活することになつたため、私達家族は、阿眞部落へ行かなければなりません。私は、房子を手放すわけにはいかず、我が子として育てようと思い、一緒に連れて行きました。

夜、寝る時は私の子供たちをおしのけて、必ず私のそばに寝のだと、せまい中を割りこんで来る時もあり、それを見ていると、とても愛らしくなつて、このかわいそうな子をどうしても一人前に見て、私の家から嫁に出してやるのだと決心までしていました。

ところがその決心も束の間、座間味部落の人が阿佐部落や、阿眞部落で生活することになり、部落の一か所に集まるよう、呼びかけている様子です。それでも、私はこの子だけは帰すまいと頑張つていましたが、一人集まり、二人集まりで人数が増えた頃、何と玉砕して死んでしまつたはずの房子の父親と祖父がその中に加わつてい

るのです。自分の娘として育てようと思つても、肉親があらわれた以上、そうはいきません。帰るのをいやがつて、いる房子を説得してやつと父親や祖父と共に帰してやりました。

これまで他人のために懸命になり、家族の事を両親にまかせたきりということで、悪口を言われた事も度々でしたが、自分は決してまちがつた事はしてきてないつもりだ、という確信があつたため、そのような悪口に屈するような事はありませんでした。

その甲斐あってか、現在では兵隊さんの奥さんや御両親と文通したり面会したりが続いていますし、また、三月二十六日の慰靈祭には役所宛や私個人宛に、毎年のように戦死された方々へのお供物や衣類、たまには、学校宛に書物が送られてきます。

そして、渡嘉敷の男子とは、今でも親子のようなつき合いが続いています。

亡くなられた兵隊さんたちに対しては、今後、惜しむことなく供養を続けていきたいと思つています。

### 集団自決

座間味村字座間味 宮 平 初 子（十六歳）

昭和二十年三月二十三日、その日は空襲があるのも知らず、午前中は家族で畑に出かけていたため、空襲が始まつてから死にものぐるいで家に帰つてきた。私達が山道を下りてくる時には、学校は焼け、近くの防空壕にかくれていた人たちはほとんどが爆風でやられたらしく、掘り出している所だった。私達は、その日から壕での生

活が始まった。

二十五日の晩、忠魂碑の前で玉砕するから集まれ、との連絡を受けたため、今日は最後の日だから、と豚を一頭つぶしみそ煮をして食べたが、なまにえであつたにも拘らずひもじさも手伝つてか、あの時の味は何とも言えないおいしさでした。食事を終えてからきれいな着物をとりだし身づくろいをしてから、忠魂碑の前まで家族で行つてみるとだれもない。しようがないので部落民をさがして近くの壕まで行つてみると、そこには部落民や兵隊らがいっぽいしている。私達の家族まではいると、あふれる状態でした。それでもむりにつめて、家族はまとまつてすわれなかつたが適当にあつちこちにすわることにした。中にいる兵隊が、

「明日は上陸だから民間人を生かしておくわけにはいかない。いざとなつたらこれで死になさい」と手榴弾がわたされた。その頃から兵隊たちは頭に日の丸のはぢまきをしめている。しかし例え手りゆう弾を手にしても、こわくて死ぬ気になんかなれない。その時の時間は午前四時頃と思われた。

私達はいつでもここに残つていてもどうしようもないでの自分たちの壕で玉砕しようと再び引き返していった。私達姉弟三人は父母の後をただ言われるままについていった。

夜明け方、何となく外が騒々しいので、朝鮮人でもいるのかな、と思って耳をすませてみると言葉が何となく違う感じがする。もしかかるとフィリピン人かも知れない、と思い入口を開けてみると、米兵が壕の前にずらりとならんでいる。あまりの数に私達はびっくりして、さつさと死ななければ、と思い、まず父がかたい組で私達が病院になつていて

「一体どうしてこんなことになったの」

というのに、答えようとする声にはならなかつた。母の場合は二回切られたせいか米兵がひきあげるまで入院していたが、傷がなおるにつれてのどがしあがれため息ができないということでのどの方に穴をあけ、そこに管を通してやつと息ができるようにしているが、現在でも十分に声を出すことができずのどにはいつもハンカチをあて、話をする時には、手でハンカチをおさえながら、穴をふさぐ恰好にして話をしなければ空気がもれて、聞きとれない状態である。

四人の首をしめたが、なかなか死ぬことができない。これではだめだと思い、今度は父が南洋から持つてきただカミソリがあつたため、それで首を切ることにした。まず初めに、母の首を切り、次に私の首を切つた。私は、何かノド元をさわつたかな、と思うと同時に暖かい血が胸を流れはじめたため、その時首が切れたんだな、と思った。そして次には、弟、妹という順で切つていくと、母が、「まだ死ねないからもう一度切つてごらん」というので父は、それでは、と再び母のノド元を切りつけた。その時に弟は、「おとうさん」という一声を出してそのまま倒れてしまい出血多量で死んでしまつた。最後に父も自分の首を切つていた。

畠に近い時間と思われた頃、米兵と父の友人が私達の壕の中にはいつきて、その人が父の名を呼びながら「どうしてこのような事をしたのか」というのが、夢うつに聞こえていた。それから私と弟の二人は死んだものと思ったのか、二人を壕の前の道に引き出し父母と妹の三人を運び出していった。それから大方頃、何かあたりの騒々しさに気が付いたので、私はまだ生きているのだな、と思っていたが起きる気力もないと、そのまま目をとじて道に投げ出されたままになつていた。

一一、三日過ぎただらうか。ふと気がついてみると、米兵がやつてきて目をあけたり脈をとつたりしてさかんに私の体を調べている。

私はそのまま連れて行かれると大変だ、と思い、せいいっぱい死んだふりして息をとめたりしたが、それだけがまかせるものではない。生きていると思ったのか私をむしろに包み病院に連れていった。そこについて、あたりを見回してみると、すでに母や妹が治療

### 壕 生 活

座間味村字座間味 宮 里 ナヘ（四五歳）

親せきが病氣で亡くなつてから四十九日の日、私は焼香しに出かけていた。その日は朝から戦争の気配が漂い、外へ出るにも家族の事を気にしながら出かけていった。

焼香を済ませた後、何かしら飛行機の爆音が激しいため、その家

のおじいさんが、様子が変だから、と帰るようにはすすめてくれた。

空を見ると敵機が島の前をさかんに飛び続けている。急いで家にひき返すと、娘がふろ敷包みをかかえて避難しようとしている様子が見える。その頃からは空襲が激しくなり、島全体が爆撃に包まれてしまつた。あっちこちでいきすりの人がかくれているのが伺える。

途中、知合いに会った所、危ないからさつとかくれるよう注意されたため、言われるまま陰に身をひそめていた。私の前には孫を連れたおばあさんがかくれていたが、数分後、真っ赤に焼けた弾が私のすぐそばの木をかすつてそのおばあさんがあたつてしまい、その場で死んでしまつた。連れの孫は、さかんにおばあさんの名を呼び続けているがおきるはずがない。それを見ていた人たちは泣き声になり、どうしよう、どうしようとあわてふためいている。しかしこう空襲がはげしくては遠くに逃げることはできない。それでも近くに壕があることを聞かれ、やつとかけつけていくことができた。

その壕からは部落がさかんに焼けているのが見えるため、不安になって出ようとした所、一人の男の人がはいつてきた。その人は私の顔を見るなり、「おばさんは飛行機に見られてしまつたから今壕を出ていくところに弾がとんできてよけい危くなる」

という。それでも私は家族の事が気になるため、無我夢中で自分たちの壕へ走つていつた。壕に着いてみると、私の子供たちと一緒に日本の兵隊がはいつている。私はそれを見て、「兵隊さんがこんな所にはいつていたら、部落民はどうなるのですか。兵隊さんは外に出て戦つて下さい」

といふと、

「おばさん、どうもないですよ。」

と口実をならべて出て行こうとしない。みんなが文句を言いだしたが、申し分けなさそうに壕のすみにちぢこまつてあるため、みんなに何も言わないよう注意した。

その晩、役所の職員から、産業組合の壕で米の配給があるから取りに来るよう、連絡をうけたため、娘二人を行かせることにした。その時、艦砲射撃で真っ赤な砲弾がとんでくるため、とうてい出られないではない。これでは危ないから娘たちにしばらく待つように言おうとしたら、すでに出ていった後であった。もうあきらめの気持で娘たちを心配していると、やつと帰つてくれた。しかし、この壕にいるものも危険な気がしたため、別の壕をさがしにすぐさま、出かけていった。

やつとある壕の前まで来た時、中から知人が、早く中にはいるよう、すすめてくれた。子供たちも一緒に中にはいつてからごはんをみんなで炊いて食べることにした。配給にもらつた米を壕の前の水たまりに行つて、暗がりなので水がどのようなのかさっぱりわからぬが一度だけ洗い流し、土でかまとを作つてごはんを炊き始めた。その時、突然、飛行機から照明弾が落とされ、あたり一面が昼のようにならぬ光になつた。急いで火を消し、場所を移動してちょっとしたくぼみにはいつた。そこはあまりにも小さすぎですることもできないし、また危険もあるため、娘に弟を連れて別の壕に行くようすめた。ところが、自分たちだけで行くのはいやだといふので、私が息子を連れて出ていくことにした。

「おじいさんは壁が材木で作られ、床まで敷かれた立派なものであった。そこには二、三の家族がはいつていたが、私が息子を連れて中に歩みよつて行くと、六ヶ月の赤ちゃんを背負つた一人の主婦が私の方に寄つてきて、「おばさん、生きられるだけ生きるようにして下さい。絶対死なないようにして下さいよ」と涙うかべて何度も言う。私ははげましの意味で、

「何も言わずにだまつていれば殺されるような事はないから安心しない」

「どうが、防衛隊に行つてゐる主人もきつと殺されているに違いない」と涙ばかり流している。その時、婦人の弟がはいつてきて、

「おまえたち、何しにここにはいつてきたか」とどなりちらしてゐる。私は頭を深々と下げて、息子一人だけ、入口にでもいいから入ってくれ、と何度もお願ひしたが、でていけ、の一点ばかりでききわけてくれない。さらには私達をなぐるしまつである。それをみて姉にあたる婦人が、

「あなたの命も、おばさんたちの命も同じ命だから、かわいそうに一緒に中に入れてあげなさい。そんなにいじわるをしなくてもいいでしよう」

と言つたために、やつと何も言わなくなつてゐた。

私はお礼の意味で手ぬぐいに包んで持つていた黒糖を少しづつわけ与え、子供たちの手ににぎらせた。

しばらくしてみると、近くの壕の主たちの話し声が聞こえる。どこからか移つてきたのだろう。私達と一緒に壕の中にいた人たちはそれを最悪の状態と思ったのだろうか。カマを首にあてながら、

「さーどうしようか。これで首を切ろうか」とあわててゐる。私はまだまだ大丈夫だから、となだめるが言うことを聞いてくれない。しまいには少し上の壕にいる人たちを呼びながら猫いらずをくれ、と叫んでゐる。

「もうしかたないからこっちはいっしょに来てくれ」

という。上にいる人たちはそれに答えて下の方に来て、みんなに猫いらずを手渡した。そして一升びんの水をまわした。猫いらずをなめては苦しみながら、早く水、水、とさかんに水を求めてゐる。例程言つたよう私の方にやつてきて、

「おばさん、ほんとに生きられるだけ生きつて下さいよ」とくり返しいながら歎を飲もうとするので、私は、

「あなた方だけ飲まずに私達にも分けて下さい」

とお願いしたが、その婦人は、ゆのみをひっくり返しながら、もうない、ということ自分で自分の口に入れてしまつた。すると、婦人の弟が入口の木に火をつけはじめた。しかし壕は土であるため、全部は燃えることなく入口だけをこがした程だった。

上の壕からおりてきた人たちは、猫いらずを口にすると、自分たちの壕で死ぬんだ、ということで急いで走つていつた。

私達は薬ももらえないし、どうして死んでいいかわからないのでそこらへんをブラブラしていると、となりの壕におじいさんがはいつてゐる。私はその人に、「おじいさん、あそこの家族は死ぬといって泣いていますよ」と話した。するとその人は、

「オランダーは男は殺すが女は殺さないから心配するな。あなた方はこっちに入つていなさい」

と言つてくれたので、しばらくそこで休むことにした。

その時、忠魂碑前で玉碎するから、ということできれいな着物を着た人たちが出てきたため、私達もついて行くことにした。ところが忠魂碑前にはだれもいない。しかたないのでそのままひき返すことにした。

後で聞いてみると、先程、猫いらざで自決した人たちの中で簡単死なない人はカミソリで首を切つたり、カマで腹を切つたりして死んだという。

私達が壕に戻った頃、自分の壕で死ぬといつて猫いらざを口にしながら戻っていった人たちはまだ死なないため、父親がそばにあつた丸太棒で奥さんや子供たちをさんざんになぐりつけて殺した後、小さな男の子が葬のためか下痢をして苦しんでいるのをみて手をつかまえ、まるで猫の子をふり回すかのようにふりまわした。そして何回か石にぶつけ、最後に丸太棒でなぐりつける。「ぐあっ」という一声で下痢をしながら死んでしまった。

私達はそれをみてびっくりしたため、別のところに逃げることにした。その頃からは米兵が上陸しているのが見えるので見つからないよう逃げるだけであったが、内心あきらめきっていた。途中、一人の年寄りが、「おまえたち、今どうから逃げてもどうしようもない。こっちに並べ、すぐ殺してやるから」とさかんに呼び続いているが、私達はそれを無視して夢中で逃げて

いた。

山が焼けているため船からはっきり見られるのでできるだけ小さくなつて歩き、やつと川原の方にやつてきた。そこはあまり焼けてないため、四、五十人の人たちが集まつていた。しかしあまりの人でそこにおちつけそうにないので、島の裏側の自然壕に行くことにした。途中道が悪いため、石と一緒にころがりながらやつと目的地に行つた頃、壕はいっぱいして、入口にしかすわれない。雨が降つて雨だれでびしょねれになるがどうしようもない。しばらくすると、娘が、上に敵がいる、というのでよくみると、部落民が子供をおぶつて壕の上をウロウロしている。壕がせまいと知つて遠りよしていのかななかはいろいろとしないのでやつとすかして中に入れてやつた。

人がいっぱいしている中で子供たちはあまりいい気持ではないのか一人の女の子が泣きだしてしまつた。ただですら声を出すのも禁じられているのに大声を出したため、母親はびっくりしてなだめようとするが言うことをきかない。周囲の人たちの中には、敵に見つかるから殺せという声がきこえた。しかし、その日は運がよかつたのか敵に見つかることはなかつた。

壕での生活は屋になると、少しずつ食糧をさがしにかけたりした。途中、兵隊さんたちに会うと、わずかの食糧から私たちにわけてくれる人もいた。

何日か壕の生活を送つたが、みんなが捕虜されていることを知つてからは、ほとんどが部落の方におりて行つた。

## 爆弾を受けて

座間味村字座間味 中村春子（二十五歳）

昭和三十年三月二十日は彼岸のため、家ではごちそうをこしらえていたが、その日に沖に停泊中のダイハツが敵機にやられたため、一時は避難さわぎができるほどであった。

二十三日は朝から戦争の気配が漂い、午後になると学校を中心多くのがやられてしまった。午後三時頃、私達は遠くまで行く余裕がないため、部落の西の方の山ろくに十一人程でかくれていた。そこは壕のようになっているが、安全なものではなかつた。

私は一番奥にはいり、すぐとなりに十歳の男の子、そして数人の年寄りや親子づれがはいついていた。

翌日の午前十時頃、爆弾がおち、ものすごい爆風に風舞われた。

私達ははいついていた防空壕というのが、地面にあなを掘り、すぐ上にわらや何やらいろいろかぶせた壕であつたため、爆風によつてそこが埋まつてしまつた。そのため、私達は生き埋めになり、ものすごく息苦しくなり出した。私は全身埋まつた恰好であったが、少しだけすきまがありやつと息ができるくらいの穴があつてゐるためそこから出ようともがいたが、どんなに頑張つても自力ではい上がることはできない。そこで何かの人たちが私達を助けるため、さかんに穴をほり始めた。その頃からは息をするのがやつて、すでに破片でうなじをやられて大ヶガをし、髪の毛はちぢれて砂まみれ

になつてゐるがそれにも気づかず、ただ息をしようとする命になつていた。

やつとの思いで助けてもらい、穴からはい上がりてみると、その頃からはうなじからさかんに血がふきだしまつた。ほんとにすごい出血なので上着やモンペまで血でぐつしょりになつたため急救治療をうけたが、頭の中にもはいつて破片やゴミはとり去るところがきないらしく、ただ、うなじの止血のため応急処置として注射しただけであった。したがつて傷口にこれといつた手当をすることもなく、少々の薬を傷口にぬりつけ、包帯をたくさん巻き、あとはほつたらかしままであった。その後は知人からかすりの着物をもらつて身につけ治療に二、三度通つていた。

私が何度か治療をうけている間に、私のかくれていた壕の近くの山羊小屋にかくれていた母や姉が見つけ出されたが頭がなく、骨もさんざんにくだけて皮もつかず、ヌルヌルしていくつかまえられない。それ以上に私は目をむけることができなかつた。母と姉の遺骨は親せきの人が家に持ち帰り、その日のうちに葬式をして下さつたという。私が再び行つた時にはすでに埋葬した後だった。しかし葬式といつても、一人のおばあさんをのぞいてはみんな箱に入れるともなくそのままふとんに寝かせて穴を掘つて埋めたようだ。

私達のははいついた壕からの生き残りは二人で、母たちと一緒にいた人々は一人だけが生き残り、あとは全部死んでしまつた。私の隣にすわつていた男の子は、あとで聞いてみると横腹をやられ、内臓がとびだしていたらしい。

私の傷口は出血が一向に止むようすがないためおじに診療所に連れていくつもあつたが、その時からは診療所には多くの死んだ兵隊や、大ケガをしている兵隊がいっぱいしている。私は順を待ちながらあまりの出血に水を請求して飲んだが、水を飲んだ量だけ血もさかんにふき出すしまつである。それでも気分が悪くなると水を請求して飲まなければ今にも死にそうな気がしてならなかつた。しかしやはり若さのせいなのか、多量の出血でもまだ元気であった。

二十五日からは艦砲射撃がはじいため部落にはおれず、ケガを負つたまま山に逃げ出しあつた。最初は近くの山の壕まで行つたがそこはとても安全とはいえず、さらに島の裏側に陥しい山道を歩いて行つた。やつと安全といえそうな場所にたどりつくと、壕をさがして中にはいついていた。その壕の中にはたくさんふとんが積まれていたのでそれに横たわつて休むことにした。しかしその頃からは傷口からの出血がはげしく、いても立つてもいられない状態になつてしまつた。来る前に何日か雨にうたれたのも手伝つたせいだろう。もう足元もしつかりせず飢えも増してくる。動けない状態で十日近く傷をほつたらかしふとんに横たわつたままでいた。その頃からは傷口がくさりかけたため、赤チンキをぬり、知人からもらつた三角巾を首に巻きつけていた。しかし、悪臭があたり一面にだよい、自分でもくさくてどうしようもない。その時から叔母が私の傷口にあてている三角巾を海で洗つたり、くさつた傷口を潮水でふいてくれたりした。その部分は、ちょうど冬瓜が腐つた時の状態とそつくりであった。傷口をおさえると化膿したうみがとびだすほどであった。それだけ腐つた頃からは蛆もわきだす始末である。

何日か終つて現在の場所では不自由を感じるため、別に移つていくことにした。しかし目的の場所についてみると、たくさんの敵が上陸しているためまた別の壕をさがさなければいけない。やつと適当な場所をみつけると、そこに落ちつくなことにした。私もずいぶん歩きまわつたが、傷を負つたまま、どんなに逃げても平気であつたことにはわれながらびっくりしていた。他に友人や兵隊らも私の行動には目を見はる始末で、どのような目にあつても死ぬことはないよ、と冗談をとばす程だった。私の気持としてはどうせあとあとは死んでしまうものだからという気持が強かつたため、何もこわいものではなくただ恩が続くままに勤いでいるに過ぎなかつた。

旧の三月四、五日になると、潮干がりにはもつてこいの日とばかりにみんなで海にでかけていつてたくさんのかざえを取つてきた。何日も食事らしい食事をしてないため、さつそく火をたいて貝をやいて食べることにした。ところがその所を日本兵に見つかってしまい、敵に見られたらどうするつもりか、という事でさんざんにぐらられてしまつた。しかしその頃からは敵機は低空してくるが、けむりをみても民間人だとわかると決してうつようなことはしなかつた。一ヶ月程してから場所をかえようと、別の壕を求めて歩いていくとそこには米兵が立つてさかんに何やら調べている。私達は久留米がすりを着て学生帽をかぶつた朝鮮人と一緒だったため、呼びとめられ、米兵は朝鮮人を日本兵だといってつかまえてしまつた。朝鮮人はたくさんいたが、彼らは自分たちのことをいつも日本人だ、といつては朝鮮人といわれるのをきらつていた。

私達は四月二十日頃、ほとんどの人が山をおりていつた、という

のを耳にしたため全員おりていくことにした。部落に着いた頃には私の傷口は中から少し赤い肉がとびだしてきていた。その時からは米兵に治療してもらつたが、米兵の治療のしかたが非常に難であるため、

「いたい！」

という声を出すと米兵が沖縄の方言で、「少ししか痛くないはずだ」と相手にしてくれなかつた。

治療に来た人たちの中には皮ふ病をおこした子供たちが多く、つかまえてきてはタフシで子供たちの体をゴシゴシこすり、びっくりさせて泣かしていた。

私の傷口には何やらい粉をふりまいていたようだが、それのためか一か月ほどではすつかりなおつてきた。しかし、左肩にはいまだかつて破片がはいつているが、何の痛みも感じないのでそのままにしている。しかし体には大きな傷あとが残り、頭の中にはいつている破片は現在でも痛みを感じられ、特に最近は後遺症がひどくなつてきていている。

あの当時、穴に埋められた人をほり出してみたり、死人の上をとびこえて歩いても何とも思わなかつたが、今はすぐ目の前にいるように思い出され、こわくてならない。

## 山の中へ避難

座間味村字座間味 宮 平 カメ (四十歳)  
高 良 律 子 (八歳)

三月二十三日から空襲と艦砲射撃が始まった。その日、私は午前中は学校に行つていたため、空襲の恐ろしさに大声で泣いて帰り、家族と一緒に屋敷の壕にかくれていたが、これでは危ないと思い、午後からは山の壕に逃げていつた。その日の三時頃から空襲も一段とはげしくなり、学校を中心とした部落全体が攻撃されていつたが、その時、私達のすぐ前の壕に爆弾がおちたため、近くの山羊小屋とその壕にはいつている人たちの中から、山羊小屋からは兄一人、壕の中からただ二人だけがそれぞれ大ケガのまま生き残り、残りは全部爆風でやられてしまつた。

二十五日の夜、母は私と弟の二人を残して、空襲のスキをねらつては家に戻り、二人の姉と妹をつれておにぎりをつくりに帰つていった。ちょうどその時、全員忠魂碑前で玉碎するから集まるよう私達の壕に男の人が呼びにきたため、小学校一年生である私は、母はいなしどうしていいものかわからいため、ただみんながむこうで死ぬのだというので、六歳の弟を連れて忠魂碑へと歩いていつた。そして母たちの方にも、おにぎりをもつて集まれ、との連絡があつたらしく、別行動で忠魂碑へ行つていつたのである。

弾が飛ぶ中を弟をかばいつつ歩いていく途中、多くの人たちが戻つてくるのに出くわしたため、そのまま元の壕に戻つていつた。やつと壕で母たちと一緒に、ここでは危険だから、ということとでまた別の壕を求めて歩いていつた。ところが部落民のほとんどが島の裏や山奥に逃げていつたのに對して私達は小さな子供達と、おまけにケガ人が一緒にいたため、どうしても遠くまで逃げることができない。しようがないので安全な壕を求めて弾の間をくぐり夢中

で山をはい上がつていった。ふしきなものであんなに真赤に焼けた弾が火花を散らしながら顔のそばをスッとかすつてとんでも体にあたることはめったにない。

どれだけ歩いていただろか。途中、役所の職員と会つたため、その人が私達の壕に行こう、といでので産業組合の壕に行つた。その壕は主に役所の職員の家族がはいつていたがしだいに安全な場所を求めてやつてきた部落民で壕はあふれる状態になつてしまい、私の家族までは到底入れてもらえなかつた。しかたがないので壕からあふれた人たちと一緒に別の壕へと歩いていつた。

私達の行つた壕は産業組合のすぐ下にあつたため、子供たちが多くてはそう遠くまで行くのは危険なので近くがいいからと、その壕に入れてもらうことにしてた。ところが中にははいつてみると、壕の主は遠くに逃げていつたのかだれもいない。私達はこれ以上逃げることができないので許可なしにそのまま居すわることにした。しばらくすると二、三の家族もはいつてきただ。はいつてきただたちはこれまで逃げることのできない年寄りと子供たちばかりである。その壕にはたくさん砂糖がはいついて食糧には心配ないが外の方はものすごい艦砲射撃である。後で知つた事だがちょうどその頃に私達がはいれなかつた産業組合の壕にいる大せいの人気が集団で自決をとげたのである。つまり、産業組合の壕は常に役所の職員が銃剣をもつて入口を警備しているため、兵隊とまちがえてその壕に攻撃を加えたのである。そこで助かる見込みがないと知り自決したのではないかと思われる。その壕からだれ一人生存者がいないためはつきりしたことはわからない。

ぬ気配はない。さらに私の姉妹にガムやチョコレートをわたすためこれで殺すつもりだな、と思い、子供たちの持つているチョコレートから母が三分の一ほど割つて口にしたが、やはり死なない。このように長い間、出て行かない、と米兵をてこずらせている時米兵の一人が手りゅう弾を投げようとした所、他の米兵が、少しまた、ととめてから壕を出ていき、通訳のできる人を連れてきた。その人の話では、ほとんどの人が出てきて、まだ出てこないのは空には偵察機が飛んでいるため、米兵は私達をつれて歩きながら偵察機をみるとふせたり、かくれたりして私達もそれにまねながらついて行つた。みんなが集まつてあるといいう役所に行ってみると一〇〇人くらいの人たちが集まつていて、私達でも出ていくのは早い方であった。

米兵は捕虜民をかこむように五メートルごとに銃をかまえ、みりをし、部落民が用足しにいくにも、いちいちついてきた。役場の外には一メートルごしほどに立ちやはり銃をかまえて立つっていた。これは友軍が夜、捕虜民を殺しにくるかも知れない、という予想からであった。

朝起きると、子供たちにおかしやチョコレートをわたしたりして非常に親切にし、また母親たちは毎朝おにぎりをつくり、みんなに二、三コずつ配つてあるいていた。

時々、焼けた山を、友軍が背のうをかつぎ逃げていくのを、米兵が四方八方から銃をうつのがよく見られた。私達がびっくりしてそれをみていると、米兵は、なるべくそういうものはみないように

私達は三日間、壕を移すことなく居すわつていたが、二十六日頃から私達の壕の上を米兵らしい者が往き来しているのが聞こえる。壕の前を水がチョロチョロ流れているがお腹がすいていてもごほんを炊いて食べることもできないし、砂糖ばかりなめていると水が欲しくてどうしようもない。その時、米兵は私達がいるのを知つたらしく入口の方でさかんに出て來い、と言つてゐる。私達がしばらくだまつていると、入口をふさいでいた木を全部はぎとつてしまい中がまるみえになつてしまつた。こうなつてはどうしようないので手まね足まねで手りゅう弾で私達を殺してちょうだい」と米兵はだまつて見つめてばかりいる。母が両手を上げて米兵の前に近よると米兵は、「カマン、心配するな。あつちに水たくさんある」といつて私達がなかなか出でていこうとしないので一生懸命説得する様子である。

もうどんなに頑張つても水が欲しいのとお腹がすいでいるのとはどうあがマンできないので、米兵がぶら下げてもつている水筒を指さして「これ」というと、親切に水筒をわたしてくれた。水筒の水をやかんに入れて飲んだわけだが、そのやかんというのが、子供たちが大せいいるため、あつちこち大便した上にころがつてあるのであるため、全体に大便がくつついている。それでもしかたないのでそのまま飲むことにした。しかし飲んでみると消毒薬がはいつているせいか現在のカルキのにおいがするため、毒がはいつているのだと思い、一人ではなくたくさん飲まないように、全員一緒に死ねるようみんないきわたるようにして飲みなさい、ということで毒を飲む思いで少しづつ口にして手わたしていつた。しかし、なかなか死ぬ

と注意していた。  
防空壕に忘れものをして取りに行きたい時は、班長のバスをもらつて、そのバスを上に掲げてみせながら出ていかなければならなかつた。

### 女子青年団

座間味村字座間味 宮城初枝（二十四歳）

昭和十八年から十九年初頭にかけて、私達青年団や婦人会が中心になって村当局の命令により防空訓練や防空壕掘りが行なわれていたわけですが、その頃はまだ戦争が始まるとのだという実感はだれも持ち得ていませんでした。それだけに島はのんびりとして、しばらくは平和そのものの生活が続いだわけです。

ところが、情勢はいつまでも島の人々が望むような平和な生活を続けさせてはくれませんでした。

昭和十九年の十月十日の空襲でその歎止めが暗示され、二十年の三月二十三日には早くも、それが最も手荒な方法で強いられてきたのです。無抵抗のままに私達はただただ逃げるより他に選ぶ道は何一つ残されていませんでした。その時から部落民の壕生活が始まつたわけです。

その日の空襲で村中ほとんどの家屋が全半壊しているか炎上するかし、部落の二十数名の人は運悪く砲弾から逃れることができず死んでしまいました。

翌日もその翌日も空襲は烈しく、それに加えて艦砲射撃までが手伝ったため、島全体が揺れ動き、人々の不安を一層かきたてていきました。その頃から軍に手伝いできない老人子供の玉碎が呼びかけられ、青年団は軍の手伝いのため山へ入り、私たち、友人三人と妹の五人は村長命令で重要書類を忠魂碑前に運ぶことになっていたため皆とは別の行動をとっていました。しかし、それも艦砲射撃の烈しさのあまり思うように行かないため、一弾でも多くの弾薬を運び、軍に協力してから自決しようということで整備中隊の壕へ向かいました。その頃、玉碎するはずだった老人子供が、沈黙のまま何処へともなく私達の目の前を通り過ぎて行ったのです。死を覚悟してはいたものの艦砲の烈しさに胆を冷やし死の恐怖と共に生への本能的な執着がよみがえったのでしょうか。

二十六日、米軍の上陸が知られ、その時から白兵戦が始まつたようですが、圧倒的な敵に迎え撃つことはできず、後退のやむなきに到りました。そのため晩には部隊命令で軍民男女全員が斬り込み隊となって夜襲を敢行することになったのです。私達五人は斬り込み隊の生存者が集まることになっている稻崎山へ追撃してくる敵を迎撃つための弾薬運びが命令されました。ちょうどその頃、部落民が各所で自決をはかり、私の家族を含めて慘事が繰り広げられていたことを私達には知るよしもありませんでした。

私達はあの重い弾薬をやつと目的地まで運び、斬り込み隊の生存者が来るのを待ちわびていましたがだれ一人として姿を見せるのはいません。急に不安と淋しさに襲われ、私達のとるべき道が口には出さずともそれぞれの胸のうちですでに決まっていました。自決で

圉されてしまいました。私たちいつの間にか兵隊さんたちとは離ればなれの行動をとるようになつていたのです。そんなおり、懸命に逃げかくれを続けていた私達のそばに突然、飛来してきた迫撃砲弾が炸裂すると同時に私は右の大脚部を棒で叩かれたような気がしました。破片があたってしまったのです。しばらくはケガの痛みをおさえながらモッコでかつがれ逃げまわっていましたが、心身ともすっかり疲れ果ててしまつた五人は、これ以上逃げまわるには限界を感じていました。

山を降りると私は負傷しているためすぐ米軍の病院へ運ばれましたが、そこへ着いてみるとカミソリで自決に失敗し米軍に収容された養母が声帯を切斷して声も出せずベッドに横たわっていました。弟は経過が悪く、すでに死亡した後でした。

とにかく、私の方は手術を受け、破片を取り出し、ようやく元通りの体に戻りましたが、米軍がこんなに住民を保護し親切にしてくれるとは夢にも思いませんでした。今まで懸命に逃げまわり、或いは自決まで試みたのは何も弾にあたって死ぬのがこわいということばかりでなかったのです。万が一、米軍につかまれば……、さまたまなデマが脳裏を離れない事が最初の要因だったようと思われます。そのデマがどこからどうして、まことしやかに伝えられたのか不思議でもあり、またそれを真に受けてきた日本人の人たちを哀れに思わずにはいられませんでした。

## 軍と共に

### 座間味村字座間味 吉田春子

当時、私は軍の炊事班の任務を負わされていたため、十九年の十月十日の空襲の日から軍と共に行動をしていました。

二十年の三月二十三日の空襲の時、ちょうど軍の壕にかくれていました。部落中が攻撃に見舞われていて、屋中は家族の事を心配しながらも、出て行くことは全く不可能な状態でした。やっと日が暮れて、米機が引き揚げてから、急いで家に帰ると、家は散々に荒らされ家族はだれもいません。ただ病弱の弟だけが歩行困難のため、近くの屋敷に避難していました。

弟と連れだって家族をさがしに恩納の方へ行つてみると、私の家族の他に、二、三の家族が一か所に集まつて、かくれていました。そこに着いてしばらくしてから、再び、激しい艦砲射撃がはじまつたので、一緒にいたおじいさんが、別の壕へと移つていつてしましました。それからというもの、わずかの残された家族は不安で、びくびくのし通しです。どうせ死ぬものだから、私は妹を連れて、照明弾の中を縫いながら、突貫隊の三中隊の壕へと走つていきました。兵隊さんと一緒におれば、いざとなつても大丈夫だと思ったからです。

私達が着いた頃、三中隊の壕ではにぎりめしに梅ぼしをつめて出かける準備をしていました。兵隊さんたちは、「自分たちは出かけられるから、あなた方は残つていなさい」と言われたため、私達は壕に残ることになりました。その壕には、足に傷をうけた長谷川さんという兵隊さん一人に、他に民間人が四、五人残っていました。さら

す。弾薬箱を受け取つて出発する際に、軍曹から万一一に備えての手榴弾を一個手渡されていたのでそれを使用することにしました。焼け残りの椎の木の生い繁る深い谷間を死に場所とし、岩つじの花束をつくつて自決の準備をととのえ、『君が代』を合唱しながら各々家族や友人に別れを告げていよいよ決行となつたのです。五人が肩を寄せ合つて輪をつくり、中央につつじの花束をそなえ、私が手榴弾の安全装置を解きました。

ところが、一分たち二分たつても手榴弾に何の変化もないため、今度は別の一人が私のやり方がありますいということでそれをとり上げようですが、圧倒的な敵に迎え撃つことはできず、後退のやむなきに到りました。そのため晩には部隊命令で軍民男女全員が斬り込み隊となつて夜襲を敢行することになったのです。私達五人は斬り込み隊の生存者が集まることになっている稻崎山へ追撃してくる敵を迎撃つための弾薬運びが命令されました。ちょうどその頃、部落民が各所で自決をはかり、私の家族を含めて慘事が繰り広げられていましたが、それが私達には知るよしもありませんでした。

その後、斬り込み隊の生存を確認し、私達五人は軍と共に行動しながら、何人かの友軍の最期を見届けてきました。何度も空しい思いをしてきたことでしょう。

それから数日、相変わらず敵の攻撃は続けられ、友軍は完全に包

にその壕は奥で二つに分かれていたため、奥の方にケガをした人を含めて四人の人たちがはいっているのを私達は知りませんでした。

一、三日してから、私達の壕の前を、だれかがしきりに往き来している様子が伺えたので「こんなに危険な状態なのに」と隙間から外をのぞいてみました。仲間とばかり思っていたのに、いつのまにか米兵が上陸してきました。私達の壕は米兵の上陸に備えて機関銃をとりつけていたのです。

あんなに敵が歩き回っているのに、どこからか水谷少尉が入ってきました。

ため、水谷少尉は、

「相手が撃つてこない限り、こちらからは絶対に撃つてはいけないぞ」と命令を下しました。

ところが言い終わらぬうちに、中に残っていた兵隊たちが、さかんに壕の前を歩いている兵隊におびえて銃を発してしまいました。それからというもの多量の手りゅう弾が投げられ、入口ふきんでは、あつちこち「ボコ」「ボコ」と破裂音が聞こえ中の方からは銃を発し、しばらく撃ち合いが続きました。

そこで水谷少尉が、

「もうしかたないから玉砕しよう」と言いだしました。

私達女性群は、しばらくすみの方にちぢこまって「きょうまでの命か」と思いつつ戦闘の様子を伺っていましたが兵隊たちが玉砕しようというのを聞いて、

「私もお願いします。私も」と我先に、伏せている兵隊たちの上におおいかぶさる恰好でとびついていきました。ケガした長谷川少尉は、傷が痛みだしたらしく、早く死んで、楽になりたいとい

ら、

「三中隊に連絡をとるために自分たちはこれから出かけるが、お前にちはここを動いてはいけないぞ」と命令を受けたので、私達だけ不安ながらも残つていなければなりません。もなくすると大雨が降り出しました。

敵が外にいる上に大雨に見舞われたため、小用をたすにもそれができなくなってしまったのです。がまんしようにもがまんもできません。しかも入囗ですませることになりました。

しばらくしてのどがかわいたため、さき程小用をすませた後流れていったものが、溜まつた水と一緒に逆に流れてきたのも知らず、それを飲んでしまいました。何という味でしょう、それでもがまんできないで、いやな顔をしながらもみんな、お腹いっぱい飲んでいました。

その後、これまで私達だけが残されているとばかり思っていたものの、私達の話声を聞いたのか隣の穴から久しぶりに顔を会わせる友人がでてきたので、お互ひつくりするやらずやら、感激の対面をしました。それと同時に、仲間が増えた事で、心強くなりました。

仲間が増えた事も手伝つて、きょうこそ、私達も壕を出て行こうと準備をしている所へヶがした朝鮮人がはいつてきました。

「私達はこれから出て行くよと思つてゐるのに、ここに何しに來たの」と腹だしさも混じえて言うと、「もうどこにも逃げることはできない。敵は完全に上陸してしまった」

った様子です。それを、

「がまんして下さい。兵隊さんたちだけ死ぬような事をしないで、私達も一緒に死なせて下さい」と女人たちは頼みました。

「これだけ大せいでは、手りゅう弾一個では全員死ねないな」とどうして死んだらいいかうちあわせている所へ、米兵からガス弾が投げこまれてきたのです。急に白い煙がたちはじめたので、兵隊さんたちが、

「ガスだ、ガスだ」

と叫びました。すぐさま、むしろなどを持つてガスをあおぎたてながら兵隊さんの毛布を大急ぎでかぶりましたが、急に目が見えなくなり始め、のどがかわき、息苦しくなってきました。その時兵隊さんたちは

「今のうちだ、自決しよう」とあわてましたが、どういう心変りか、水谷少尉は今度は自分が命令を下すまでは絶対に自決をしてはいけない

といいました。水谷少尉は防毒マスクをかけていながらも非常に苦しそうです。

「今のうちだ、自決しよう」

とあわてましたが、どういう心変りか、水谷少尉は今度は自分が命令を下すまでは絶対に自決をしてはいけない

といいました。水谷少尉は防毒マスクをかけていながらも非常に苦しそうです。

煙がしだいに薄れてから各自の生存を確認しあい、そして水谷少尉手持ちの酒があつたので、それで少しすつのどをうるおしてやつと落ち着きをとりもどしました。ところが、最初は全員無事だと思つていましたが、後で気がついてみると奥の方にケガしてはいっていた人は死んでいました。

その晩、「場所を敵に知られた以上、早めにここを出なければいけない」ということになりました。一緒にいた空賀隊の兵隊さんか

と言うのです。そうしているうちに、兵隊さん達もみんな帰つてきました。やはり壕を出るのは無理なようです。しばらくは動かないことにしました。ところが、壕に留まることに決まってから少し気持ちが落ち着いたせいか、みんな水を要求してきました。無理もありません。先程から水らしい水を飲んでいないのです。がまんできないという事で、梅干しの樽が空いていたので、将校が朝鮮人に水をくんでくるよう命令して、いやがついているにも拘らず反対するところなく水をくんできました。水がくると、みんなは飛びつかんばかりに水を飲みはじめました。ところが、容器が梅干し樽なので、すっぱくてかないません。それでも、飲まないよりはまだ、とみんながまんして飲んでいました。腹いっぱい飲んで終わつた所へ水谷少尉が、「もう、みんな腹いっぱい飲んだのだから」と残つた水を手や顔を洗つてしましました。その後、やはりすっぱい水では水を飲んだ気がしないということで、手や顔を洗つた後の水を、再び飲む人もいました。

何時間かしてから、やつとその壕を出ることになり、手りゅう弾を一個ずつもらって自由行動をとることになりました。手りゅう弾一個あれば、五人家族は充分死ねるのです。

女人達四、五人は高月山の方へ登つてきました。下の方を見下ろすと戦車やジープが走りまわり、それに鉄帽をかぶった兵隊が行き通っている様子です。もう、いくさは勝つたので友軍はまっすぐ歩いているのだなと思いました。

ある程度樂觀の気持ちで歩いていると、防衛隊として参加している村の青年達と会つたため、大和馬の整備中隊の壕へ行こうと相談

しました。そして、

「手りゅう弾は男が持っている方がいいから自分たちによこしなさい。君たちは自分たちの後を追ってくればいい」

と言うので、それに従うことになりました。ところが、私達が歩き出そうとした時、上方で話し声が聞こえるため、顔を出してみると

ちょうど私達を撃つのに都合のいい場所に、米兵が銃剣をかまえて立っているのです。団体で行動すると感づかれる恐れがあるため、別行動をとろう、と相談した所、いつの間にか男の人たちは姿を消していました。それからというもの、心細くて弾の中を縫つていかなければいけません。

途中、山が深くて避難に絶好の場所まではいりこんでいたため、目的地の整備中隊の壕に行かずに、そこで一休みすることにしました。しばらくすると、番所の山から大せいの住民が下りて行くのが見えるため、何があつたのだろうと、ふしげに思つてゐる所へ、今度は、阿佐道の方からたくさん、米兵が銃剣をかついで走つたらんできました。そして、私達のいる方を向いてすわりこんでしまったのです。私達は、全く逃げる手段を失なつてしまひた。しばらくは、沈黙の状態が続きました。

何時間か経過してから、彼らが移動を始めたため、私達もひき返すことになりました。

大急ぎで山道を歩いていると、三中隊の壕で一緒だった水谷少尉や、ケガした長谷川少尉らと会つたため、今までの状況を話すと、三中隊の壕へ全員、引き返すことになりました。暗い坂道をケガしれた兵隊をかついで夢中で登り、やつと壕にたどりつくことができました。しばらくは、沈黙の状態が続きました。

「食糧はもう心配ないだろ。さて、どこへ行こう」

と、案内してくれるよう言われました。ところが、みんな、自分の家族の壕一帯だと、地理的にも詳しいが、その他の所となると、全く皆無の状態です。さっぱり見当がつかないので、全員、自由行動をとることになりました。その頃からは、みんな疲れが出たといふことで木かげにすわつたまま、だれも立てません。しばらく休んでいると、いつの間にか仲間の一人がいなくなつてゐることに気がつきました。あわてて彼女の名前を呼んだり、あちこち調べてみると、やうやうと大和馬の方からやってくるのです。どうしたのかたずねてみると、一人で大和馬の整備中隊の壕に行こうとした所、水の豊富な場所を見つけたので一人で飲んではもつたいないと思い、私達をよびに来たとの事。さっそく、その場所に向かうことにしました。なるほど、着いてみると、水は豊富な上、山が深いため、敵に発見されることはあります。みんな思うぞんぶんに水を飲んでそこで一夜を明かすことにしました。ところが、やつと水が飲めたと安心しているところへ、ケガした長谷川少尉が破傷風になつたらしく、

「何か首すじが変だ、どうしたんだろう」

とくり返し言っています。少しづつ水を飲ませてやると、あの大きな男が水を飲み込むのもがきにもがいてからしか、飲み込めませんでした。彼は自分の持つている日本刀でさし殺してくれるよう頼んでいましたが、生きのびられるだけは生きてくれるよう、私達は逆にお願いしました。しかし、あまりにも苦しそうなので、一緒にいた兵隊さん達も最初は断わり続けていたのに、見ておれなくなつたのか

した。あたりは真暗やみで入口が見えないため、マッチをつけてみると、せつかくやつてきたにもかかわらず、入口は、開けられないようにしつかりと閉じられているのです。しようがないので、また

引き返すことになりました。山を登つて行く途中で、夜が明けてきたため、明かるくなつてからは、自由に道を出歩くことはできません。敵に発見されるからです。

竹やぶをかきわけ、安全な場所を見つけて、昼中はそこに隠れていることにしました。

あたりが暗くなりはじめた頃、月がでて、道をあかるく照らしてくれました。安全だから、と出かけようとした時、水谷少尉から、水をくんぐくるよう言われましたが、不安なので、断わつてしましました。それからとくもの、少尉はカンカンに怒り出し、別の人

に言つけてから、私に向かって、「お前は、俺たちについてきてはいけないぞ」と言つています。それは言われても、一人だけ置いてきぼりにされは心細いので、こっそり、うしろからついて行きました。ところが

「お前は、俺たちについてきてはいけない身です」

と逆に反抗して行ったので、とうとうおどかすだけで、斬りつけてはきました。

そのような事がありながらも、水谷少尉は、自分の手元にある食糧を、兵隊や私たちに同じように分けてくれ、

「おまえは来とはいえないはずだ」と日本刀をふりまわしてきました。

「どうせ、いくさで死んでしまう身です」

と通りに反抗して行ったので、とうとうおどかすだけで、斬りつけてはきました。

そのような事がありながらも、水谷少尉は、自分の手元にある食糧を、兵隊や私たちに同じように分けてくれ、

どうせ死ぬものだから、と念願をかなえてやることにしました。

残されたわずかの時間を同僚たちとあれこれ話しをしてから最後に、

「私が死んだ後、上から何も見えないように土をかぶせてくれ。そしてあなた方は私の死ぬ姿を見ないよう上の方に行つていなさい」と言葉を遺しました。私達は言われた通り彼の見えない場所に行き、銃声が聞こえた後、戻つてきました。長谷川少尉はすでに事切っていました。その後、遺言どおり、土をかぶせてから、銃声がした以上、そこに留まるのは危険として移動することになりました。そろつて歩き出した頃、みんなまともに食事らしい食事もつてないので、少しでもつまづくとすぐひっくり返つてしまふ状態になつてきました。

月夜の道を、夜通しすべつてころんでははい上がりとり返しながらガケを登つて行くと、稻崎山の中腹までやつてきました。つまり、島の裏側に着いたわけです。海岸は軍艦がぎっしりと埋めつくしていました。これまでの疲れが一度におおいにぶさつてきたせいが目もあけてはおれません。みんなも黙りこくっています。

いつの間に寝てしまつたのか目をさますと、またまた先程の女人がいません。どこへ行つたのだろうとみんなでさがしていると、夕方になってから戻つてきました。話を聞いてみると、山のふもとを二、三人影が往々來していたため、何事だろうと、一人でさつさとおりていつたという事です。彼女の話では、こんなに逃げ回つて歩いているのは私達だけで、民間人は大せい一か所に避難しているということでした。なるほど山の上からみると住民が壕の中を出入

りしている姿が伺えます。一週間近くだれにも会うことがなかつたため、住民はみんな死んでしまつて、自分たちだけが生き残つてゐるばかり思つてはいたものが、こんなに大せい生きているとは、夢みたいな感じもします。そこでは、だれそれは捕虜になつたとか、だれは玉砕したとか、あらゆる情報が聞かれたとの事でした。私達も仲間に入れてもらつて山をおりて行くと、やはり顔見知りの人たちが大せいいます。その時から私達は住民と共に生活することになりました。

みんなは夜になると芋を人の烟からこつそりとつてきたり、なべがないため、ちょっと大きめのゆがんだ空罐をさがしてきて、それ一つで、芋を洗つて炊いたり、水をくんできて飲んだり、野菜を洗つたりしました。

芋がやや焼けたと思つた頃、敵にばれそうになつたため、芋配がする、それをやめ、火が残つてゐるかまには水をかけて急いで消し、煙をかくそと、一生懸命あおぎたてたりました。

そのような生活が二日も続いた頃、敵にばれそうになつたため、阿佐部落の裏海岸へ行くことになりました。食糧がないため、何か流れてくるのをさがしながら行こうと海岸ぞいを歩いていると、いつの間にか部落民の避難しているユビナの壕へたどりつきました。そこでは、この壕にいただれだれは出ていつしまつたと話をしましたが、そう言いながらも、やはり自分たち自身、食糧もないし、島全体は軍艦に囲まれてゐるし、先が見えて不安になつたのでしょうか。だからともなく、自分たちも出て行こうという話がもうち上がりました。私達もこれ以上抵抗しても……、と、やはり決心

を固めました。みんなが支度している所へ、まるでうちあわせていたかのようにタイミングよく大発がやつてきて、私達を座間味部落の方へ連れていつたのでした。

## 渡嘉敷島の集団自決

渡嘉敷村字渡嘉敷

元渡嘉敷郵便局長 德平秀雄

### 甲種合格全国一の渡嘉敷村

私は昭和三年徴兵検査をうけました。県立師範を卒業して、郷里で教職についたばかりでありました。検査場の小禄村の学校には、地元の小禄村の他豊見城村、渡嘉敷村から若者たちが集められていました。

渡嘉敷は私も入れて、十八名、人数はいちばん少ないので、一目瞭然、私の村はぬきん出た屈強な若者ぞろいで、他村を圧倒的に押えて、十八名中ただ一人が第一乙でその他は甲種合格。しかもその年度の合格率全国第一になり、朝日新聞社から、賞状をもらいました。それ以来、連続五回全国第一位の地位を保つてきました。

渡嘉敷は水が豊かで米はよく採れ、元来が鰐業が生業ですから、主食と良質の蛋白質に恵まれ、人間の発育に影響したのです。それだけに国家の教育は徹底的に、すみずみまで行き渡つていました。この戦争ではそれを見のがしてはならないと思います。

### 上陸まえ

私は十・十空襲あと、迫り来る戦争に、どうにか家族を疎開させ

よう、と、軍隊に掛け合つたのですが、許してもらえませんでした。

というのは、慶良間列島は、基地隊の陣地構築と同時に、海上封鎖し、村民は一步も島を出られないし、他所からここへ来ることも出来ませんでした。糸端の漁師が封鎖一日まえに来て、そのまま帰

れず、戦争に巻きこまれたのも数人いました。

私たちちは、この島には、秘密兵器の基地が構築されているとは知つてはいましたが、誰も口には出しませんでした。私たちの背後には、いつも、監視の目が光つてゐたのです。

私の郵便局は、建物はもちろん電話、ストップオーツまで軍に接収され、私の仕事はもう何もなくなりました。医介補の伊野波先生がいた診療所は本部の医務室に替り、小学校は兵舎に、学校は海岸端に仮小屋を造つて授業する仕末、渡嘉敷の全てがこのように戦争一色に塗りつぶされ、緊張の中で、いよいよ戦争を迎えることになりました。

この村では、適齡の男性は、ほとんど防衛隊にとられ、村長と私が最後まで召集をうけてはいません。鈴木隊が引き揚げ、替つて特攻隊の赤松隊が、戦闘の配備につく頃、村長も私も、仕事と云え

ば、軍の要求を民間におろすことと実質的には、私たち赤松隊長の下で、勤いていたに過ぎません。

三月二十三日、早朝、私は、その前の日に渡嘉敷を訪問していた鈴木基地隊長の宿舎に挨拶にいっていました。温厚な鈴木隊長は、渡嘉敷で陣地構築中、私の家にしばらく滞在していました。その時の謝礼にと、黒砂糖と煙草をわざわざ届けて下さったので、御札を申し上げようと訪ねた所でした。突然聞き憶えのある爆音です。

グラマンに決まっています。私は、鈴木隊長殿、御元気で、私は帰りますと、挙手の礼をして、一直線自宅にもどりました。

軒に吊したザルの中には、昨夜の彼岸祭りの、のこり物を入れてあります。私は、家に入りしな、ザルに手をやり、ワシ撫みに、豆腐やら、モチやら、ほおぼりながら、貴重品を皮嚢の中に収め役場の壕に行きました。そこには、作業中の兵隊や役場の職員がつまつていて、寸分の隙間もありません。

私は、壕の外のついでに、せいいっぱい身を寄せていました。機銃掃射は砂煙をたてて、地上を這い廻っていました。

その頃妻子らは、自家の山の避難小屋で寝泊りしていましたが、空襲の朝は、ちょうど山から下りて、学校の仮校舎に差しかかった所で、壕を求めて、遁走している私とばったり会いました。私は有無を云わせず、子供の手をとつて、再び山の壕へつっ走りました。田畠のアゼ道を二町にも足りない距離を、走つて、一里もの道程のようでした。

三月二十三日

この村では、適齡の男性は、ほとんど防衛隊にとられ、村長と私が最後まで召集をうけてはいません。鈴木隊が引き揚げ、替つて特攻隊の赤松隊が、戦闘の配備につく頃、村長も私も、仕事と云え

した。

私の家は、残つていました。しかし向い会っている役場といい、私の家といい形が變つてゐるようでした。入口の福木の大木が二本、なぎ倒され、裏に廻ると、牛小屋は潰れ、それに仔牛が死んで倒れていました。家中に入ると、一番座敷に小型爆弾が投下され、屋根に直經二メートルばかりの穴を開け、一直線に、ちゃぶ台の真中を通り、床につき抜けていました。一面に飛び散つてゐるのは、先祖の位牌、書籍類、古い道具類、もうそこは手のつけようもありませんでした。

福木のすぐ下には、米、味噌、鰯節など、塹を掘つて保存してありました。影も形もありませんでした。二十三日は、しかしこれでおしまいではありませんでした。夜になると、山といわば、村といわば、焼夷弾を投下して、焼き払つていました。

### 初めて米兵を見る

二十三日から始まつた空襲はそのまま、二十四、二十五日と激しさを増すばかりで、いつこうに、おどろえる気配はありませんでした。とうとう艦砲射撃を見舞わされるまでになつていました。

二十七日昼、壕を出て小用を足していました。ひょいとなんなく前方の山の頂を見ていました。まさかと思った米兵が立つて、こちらを双眼鏡でのぞいてゐるのです。自分の眼を疑いました。沖縄にまで米軍が上つて来るなんて信じられませんでした。

とたんに私は身がふるえ出し、言葉も出ません。小屋の中で家族の者にどう伝達したか記憶にはありませんが、「アメリカーが、ア

込んで、重い荷物になつていました。

恩納川原に着くと、そこは、阿波連の人、渡嘉敷の人でいっぱいでした。そこをねらつて、艦砲、迫撃砲が撃ちこまれました。上空には飛行機が空を覆うていました。そこへ防衛隊が現われ、わいわい騒ぎが起きました。砲撃はいよいよ、そこに当つていました。

そこでどうするか、村の有力者たちが協議していました。村長、前村長、真喜屋先生に、現校長、防衛隊の何名か、それに私です。敵はA高地に迫っていました。後方に下がろうにも、そこはもう海です。自決する他ないので。中には最後まで闘おうと、主張した人もいました。特に防衛隊は、闘うために、妻子を片づけようではないかと、いつていました。

防衛隊とは云つても、支那事変の経験者ですから、進退きわまつていていたに違ひありません。防衛隊員は、持つて来た手榴弾を、配り始めていました。

思い思ひにグループをつくつて、背中合せに集団をなしていました。自決ときまる、女の子の中には、川に下りて顔を洗つたり、身体を洗つてゐる者もいました。

そういう状態でしたので、私は、誰かがどこかで操作して、村民をそういう心理状態を持っていましたことは考えられませんでした。私のグループは、私は四歳の長男を膝の上に置き、二歳の長女は妻が抱いて、私の向いには、私の妻の兄の村長一家が陣どつていました。

何とか村長はいつていました。私は目をつぶつて今、自分が死ぬのを待つていました。私は、何も考えませんでした。つとめて、正

メリカーが……」と言葉はこれ以上出ません。手まねで納得させたのでしょう。

ことは危ぶない、と私たちは、かねて準備してあつた西山陣地の後方、恩納川原の避難小屋めざして出発した。誰の命令だったか知りません。その時村民も、私たち同様、恩納川原に向かつてぞろぞろ歩いていました。

### 集団自決

那覇に嫁いでいた私の姉は、中学生の長男を残して、十・十空襲で焼け出されたために、私の所に同居していました。私の家族は妻と子供二人。私は末っ子をおんぶし、姉とその小さい子供たち四名をひきつれて、泥ん中の歩いていました。村はずれまで来る

と、私の恩師の真喜屋先生御夫妻に会いました。真喜屋先生は、首里の人で、渡嘉敷小学校の校長を最後に永い教員生活を辞められた方で、渡嘉敷を第二の故郷ときめ、そのまま島を去らずにおられた方でした。

先生は、初めは私の誘いも断つていましたが、私は半ば強引に、西山へ皆な行くし、あそこなら万一のことがあつても、私がご一緒

していますから、面倒を見ることも出来ますと、いうと、そうですかと、ひとことおっしゃって、しぶしぶ私について来られました。

私にはこの次に何が起きるのか、見通しがつきませんでした。

私たちは真暗闇の中を、手さぐりで進んで行きますと、しのづく雨はいよいよ強く、私たちの行く手をさえぎつていました。末っ子をおぶつて、その上にすっぽり被つていた綿入りの丹前は水を吸い

常ではなかつたかと思ひます。村長はパカパカ叩いては自分のふところに入れ、それをくり返していました。

発火しない手榴弾に私はいら立ち、村長から奪いとつて、思いきり、櫻の木の根っこに叩きつけるのですが、やつぱり発火しません。周囲は、どかんどかん爆発音を発していました。その時、米軍の迫撃砲がいちどんと激しくなり、ばたばた倒れる者が居りました。この時の迫撃砲で死んだのも少なくはありません。

どかんどかん撃ち込まれる迫撃砲をのがれて、私たちは死にそこねていました。たぶんそうだったでしょう。その時は悪夢からはつきり覚めたようでした。村長をせかせて、私たちは、そこを離れました。

姉の長男と長女が手をつないで立つていました。そばには姉と赤児の死体がころがつていました。私たちは西山の日本軍陣地に向つていました。日本軍に何かしてもらわなくてはならないと自然に足がそこに向いたのは、当然です。

西陣地には着剣した兵隊が立ちふさがり、陣地内に一歩も入れてくれないです。ワイワイわめきながら侵入しようとした村民に、日本軍は発砲していました。迫撃砲も更に激しく、陣地を追われて逃げまどう村民をおつかけて来るようでした。終始、私の後についていた妻が、「うん」とうなつてしゃがみ込みました。妻は苦しそうに腹を押えているのですが、指の間から腹わたがとび出していました。子供だけは必ず助かるよう、私に早く皆と一緒に逃げるよう哀願していました。私は水を置いて、そこを離れ、恩納川原下流めざして下りて行きました。

二日間どうでしたか 諸候におとすません 私は再び自決場に戻つてきました。もしや妻が生きているのではと、しかし妻はどこにも見当りません。妻がどの辺に倒れていたのか方向を知りませんでした。私はその時どうせ生きられないと思うこと、死んでしまふるかという生への執着心が交錯していました。この地獄の如き様相をまのあたりにしていると、はつきり自分というものがわかつて来たようでした。

一緒に二歳の娘の口に流し込んでいました。私は、山を降り茶山を

通して、自持の場にもどって来ました。自決の日から三日目の二月三十一日でした。

卷之三

この兵隊ごらく、自古庄といつて、本隊から支給を一切折りこむ  
た。和たか義子は生きていましたが、二人の面倒を見ていた  
私は、生産をしなければなりませんでした。私の壕の上方には、  
第三中隊の分所があつて、たえず一、三〇名くらいの兵隊がいまし

て、いろいろなものを漁つて、自給自足を営んでおりました。隊長の田所少尉は、時々私の壕に下りて来て、よもやま話をしていましたが、食糧に窮していることは誰も同じだ、私たちは夜間一緒に稲刈りすることになりました。

百年まえペルリが来たこと

私たちをどん底に落したり、私の妻も入れて何人もの人がこれに殺されたのだろうか、感無量であった。かたわらの双眼鏡をのぞくと、なるほど白い煙が出ている。私はいいかげんにストップをかけておきました。

そして一枚の地図を広げて、今、弾の当たった所はどこか地図で指摘してくれと、いうのです。私は地図を見てびっくりしました。山の名、谷の名、小川名まで逐一記入され、しかも俗名で、トウトン・ジャーラとか、ヒランチーだとローマ字で書かれてあるのです。

私が小学生の頃、まで生きていた、私の祖母の話を思い出しました。私の祖母は、那覇に上陸するまえ、渡嘉敷にペルリが来て、海と陸地を測量していたというのです。この地図はその時に出来たものかも知りません。アメリカの物量だけじゃなく、科学の水準の高さに今更ながら舌を巻いてしまいました。

## 日本軍に軍使を出す

私は収容所では配給カード作りを命ぜられていました。ある日、収容所長格の大尉が私の幕舎にやつて来て、軍使を出してくれといふのです。前にも軍使が殺されているし、私には人選することは出来ませんと断わりましたが、日本軍陣地へ最後の手紙なのでは是非ともうのです。私は中国で戦争の経験のある者がよいだろうと、二人の若者を選定しましたら、米軍について来た少年二人も、行くといふのです。この少年たちは、日本軍には頗るなじみで、いかなる事態

渡嘉敷村長の証言

か起きようとも、自分たちは大丈夫だといって出て行きました。帰つて来たのは、経験者二人で、少年たちはとうとう帰つて来ませんでした。少年たちの持つて行つた手紙が届いていたことは、その翌日早朝、知念少尉らが、降伏に応ずると、山から降りて来たことでもわかります。

### 言い足りないこと

どうしても云い足りない感じがします。集団自決は、私のことのみふれましたが、私は痛み入ることばかりです。それは真喜屋先生御夫妻の遺体が無惨な姿のまま、ころがつていたからです。私は面倒を見るどころではなかつたわけです。

生真面目で通つていた先生は、自決しようと主張したといいます。そして、真先に果ててしましました。このようなことは一体誰の責任でしょうか。あの時、特攻舟艇を自沈させ、うつろなまま上陸を迎えて途方に暮れ、統率力を失つていた赤松隊長の責任か、また、村民の責任なのか、私はこれから更に、この問題を考え続けて生きて行かなければならぬだらうか。

言ひ足りないこと

八月八日朝 私は投降しました。一人の児童は弱り果ててしましました。私はそのまま米軍の幕舎に入りました。天氣のせいですか、すぐがすがしい気持でした。米軍は私を尋問しました。そして日本軍の所在を知らしてくれというのです。日本軍は圓おうにも、出て来てくれないので、徹底的に野砲を撃ち込むのだというのです。

私は途方にくれました。まさか知らすわけにも行かないのですが、夜中に歩いて来たので一休どこになつているのか知らないと、答えると、アメリカ軍は、それ以上つっ込んだことは聞こうともしませんでした。

私の砲台につれて行き、それから迫撃砲を撃つから、当つて白い煙が出るはずだからだいたいそこだと思った所から煙が出たら、ストップをかけてくれといつてどんどん撃ち始めました。

口をもぐもぐさせながら、楽しそうに、撃つているこの迫撃砲は

米軍に投降する

八月八日朝、私は投降しました。二人の幼児は弱り果てていました。私はそのまま米軍の幕舎に入りました。天気のせいで、すみれましたが、私は私を尋問しました。そして日本軍の中に歩いて来たので、一体どこになつているのか知らないと、答えるべく、アメリカ軍は、それ以上つゝ込んだことは聞こうともしませんとした。

私を砲台につれて行き、それから迫撃砲を撃つから、当つて白い煙が出るはずだからだいたいそこだと思った所から煙が出たら、ストップをかけてくれといつてどんどん撃ち始めました。

「口をもぐもぐさせながら、楽しそうに、撃つているこの迫撃砲はどうでもわかります。

言い足りないこと

どうしても云い足りない感じがします。集団自決は、私のことのみふれましたが、私は痛み入ることばかりです。それは真喜屋先生の妻の遺体が無惨な姿のまま、ころがつていたからです。私は面倒を見るどころではなかつたわけです。

生真面目で通つていて先生は、自決しようと主張したといいます。そして、真先に果ててしましました。このよくなことは一体誰の責任でしょうか。あの時、特攻舟艇を自沈させ、うつろなまま上陸を迎えて途方に暮れ、統率力を失つていた赤松隊長の責任か、また、村民の責任なのか、私はこれから更に、この問題を考え続けて生きて行かなければならぬだらうか。

日本軍は、もっぱら食糧あさりこあずくれて、見る末でした。と  
隠ですからいくらうみ探しても足りません。とうとう米軍陣地に近  
づき、地雷に触れて死んだのもおりました。

は恰好な隠れ場所があつた。また一つ山越せば頼みとする日本軍が陣どっていた。恩納川の下流は細く二手に分れていて、左右は絶壁である。

ここからは、米軍は上っては来れない。この谷間は全体が完全に死角になつていて、そこには十・十空襲後、村では、唯一の隠れ場所として小屋も二、三棟建ててあった。

安里喜順捜査が恩納川原に来て、今着いたばかりの人たちに、赤松の命令で、村民は全員、直ちに、陣地の裏側の盆地に集合するようになると、いうことであった。盆地はかん木に覆われてはいたが、身を隠す所ではないはずだと思つたが、命令とあらばと、私は村民をさせさせて、盆地へ行つた。

まさに、米軍は、西山陣地千メートルまで迫つていた。赤松の命令は、村民を救う何か得策かも知らないと、私は心の底ではそう思つていた。

上流へのぼつて行くと、私たちは、そこで陣地から飛び出して来た防衛隊員と合流した。その時米軍はA高地を領占し、そこから機関銃を乱射して、私たちの行く手を拒んでいるようであった。

上流へのぼると、渡嘉敷は全体が火の海となつて見えた。それで艦砲や迫撃砲は執拗に撃ち込まれていた。盆地へ着くと、村民はわいわい騒いでいた。

集団自決はその時始まつた。防衛隊員の持つて来た手榴弾があちこちで爆発していた。

安里喜順捜査は私たちから離れて、三〇メートルくらいの所のくぼみから、私たちをじつと見ていた。「貴方も一緒に……この際、

生きられる見込みはなくなつた」と私は語つた。「いや、私はこの状況を赤松隊長に報告しなければならないので自決は出来ません」とつていった。私の意識は、はつきりしていた。

私は防衛隊員から貰つた手榴弾を持って、妻子、親戚を集め、信管を抜いた。私の手榴弾はいつこうに発火しなかつた。村長といふ立場の手まえ、立派に死んでみせようと、パカッと叩いては、ふところに入れるのですが、無駄にそれをくり返すだけで死にきれな

い。

周囲では、発火して、そり返つている者や、わんわん泣いている者やら、ひよいと頭を上げて見ると、村民一人ひとりがいたずらでもしているように、死を急いでいた。そして私は第三者のように、ヒステリックに、パカパカ手榴弾を発火させるために、叩いていた。

その時、迫撃砲は私たちを狙っていた。私は死にきれない。親戚の者が盛んに私をせかしていた。私は全身に血と涙をあげていた。

すぐうしろには、数個の死体がころがつっていた。

私は起き上つて、一応このことを赤松に報告しようと陣地に向つた。私について、死にきれない村民が、陣地になだれ込んでいた。

それを、抜刀した将校が阻止していた。着剣した小銃の先っぽは騎士のじやまだから陣地に来るな、と刀を振り上げていた。

陣地を追つぱらわれた私たちは、恩納川原にひきかえした。一部は儀志保島に対面する、この島の北の端に移動していただつた。その時自決用の手榴弾の爆発音と、生き残つて途方を失つた村民の阿鼻叫喚に、迫撃砲が誘われたように撃ちこまれていた。

私は恩納川原への道すがら、盆地にひきかえしていた。救助に來ていた防衛隊員が、あなたの妹さんは死んでいました、といつていだ。しかし私が着いた時、妹は虫の息で、まだ生きていた。妹は私と一緒に自決ではないはず、米軍の撃ち込んだ迫撃砲なのかな、あるいは誰かに殴られたのか、とにかく土の中から、這い上つて来た、といつていた。しかしこの妹はそこで二人の子供を失つた。

私自身、自殺出来ないことが大変苦痛であった。死ぬことが唯一の希望でもあつたが、私は村長の職責をやつぱり意識していた。今に、日本軍が救いに来るから、それまで、頑張ろうと生き残つた人たちを前に演説していた。

生き残つた中から看護婦の心得のある者を探し出し、防衛隊が救い出して、陣地に運んだという十数名の村民の看病に当つられた。たしかに、今、糸満市で教師をしている仲村茂子さんと、小禄に住んでいる北村春子さんはなかつたか……。

私は、問題が残る。二、三〇名の防衛隊員がどうして一度に持ち場を離れて、盆地に村民と合流したか。集団脱走なのか。防衛隊員の持つて来た手榴弾が、直接自決にむすびついているだけに、問題が残る。私自身手榴弾を、防衛隊員の手から渡されていた。

この問題を残したから、死に場を失つて、赤松隊と自決しそこなつた村民とが、この島で、苦しい永い生活を続けることになつた。

## 赤松と私

集団自決以後、赤松が私に対する態度はいよいよ露骨に、ヒステ

## 副官の証言

### 渡嘉敷島へ

元海上挺進第三戦隊副官  
元陸軍少尉 知念朝睦

私は昭和十八年召集をうけて、鹿児島第四連隊に入隊しました。その後幹部候補生に合格して見習士官となり、昭和十九年七月、當時編成して間もない、水上特攻隊(マル)の搭乗員として、四国に居た赤松隊に配属されました。

約一ヶ月、厳しい訓練のち宇品港を出て、門司、天草、鹿児島と点々として、南方に向つたのは九月も中葉すぎていました。

九月末に、着いた所は、南洋ではなく沖縄でした。船はそのまま私の郷里の首里を向いて、渡嘉敷に入りました。赤松隊では、県出身は私ひとりでした。方言が通するので、いろいろ問題がありました。それだけに、私はつとめて、村民との交渉を必要以外はさけていなければなりませんでした。

戦争ですから兵隊優先は止むを得ないことです。民家に分宿して

いる兵隊たちは母屋を占領していました。小さい島ですから、いやおうなしに軍、民接触せざるを得ません。

いろいろなしわ寄せが村民にかかり、たちどころに行きづまつていました。はじめは、そうでもなかつたのですが、私は聞かぬふりしていました。ですが、「この兵隊どもがここに来なければ……」と方言で愚痴をこぼしていました。それが日がたつにしたがつて、兵隊に対する不満は大きくなり、広がつて行きました。

そういう状態でしたから私は方言も使わないし、村民と用事以外は殆んど口をききませんでした。村民の生活が、まともに出来なくなるのですから愚痴も仕方のないことでした。

このようなことは、沖縄の縮図のようなもので、兵隊が来て数か月で沖縄全体が、そういう雰囲気になつていきました。

私は隊長のお供で那覇に出ることがありました。首里は私の生地ですし、私の家族は熊本に疎開して首里にはいませんでしたが、出覇の度ごとに親戚の者を訪問して、安否を気づかつていました。

ある一日、私はその親戚の家族とつるいでいました。そこへ陣地構築にかり出されて、モッコやツルハシを背負つている男女がぞろぞろと、私のすぐそばを通り、ちらりと私を見て、「此奴らのために難儀するよ」と過ぎていきました。

沖縄県人の心の中には本土人に對し特別の異和感があつたことは素直に認めなければならないと思います。どうにも他府県の連中のために自分の生活が毎日破壊されて行く状態には、我慢がならないと、いうことでした。

私は県立工業学校を卒業して、大蔵省に入り、大分と東京から採

用された同年の二人と一緒にでしたが、その時、私は東京は全く別世界でした。私は寮で毎日出てくる「おかず」の名前を知らなかつたのです。「琉球者」とさげすまれ、苦しいことばかりで、なじむまでに永い時間がかかつたように思います。

そういう私は、いつの間にか、他府県人には負けないぞ、という生き方にかわつて行つていきました。これは大なり小なり、他府県で生活した沖縄県人が体験することです。

このように他府県人に対する異和感と、他府県人が持つている差別意識とが、まああわされて、この戦争でさまざまなものになって現われたと思います。

#### はじめての敵

十・十空襲は那覇でぶつかりました。当日は第三十二軍の兵演習の行われる予定でそれに参加する赤松隊長のお供で私は波之上にあった旅館に寝泊りしていました。

兵棋演習は参謀本部が招集し、第三十二軍の総合的作戦計画ということで、水上特別攻撃隊の部署についても、討議されることになりました。

当日、爆撃と同時に私たちは近くの高射砲陣地に避難しました。何十機と群がつて敵機に、高射砲隊はひるまず応戦するのですが、弾は米機にあたりませんでした。

私たちもその場を出て、今の山形屋うらにあつた船頭司令部に行きましたが、大町司令官はどこに避難したのかわかりません。司令部の近くの櫻に避難していると、那覇の街は燃えていました。はじ

めての敵は、あまりにも強烈でした。

#### 海上挺進隊①

海上特攻隊は、慶良間には三つありました。梅沢少佐のひきいる座間味の第一戦隊は、単頭中隊で、司令官大町大佐はときどき、そこへ、作戦計画で現われているようでした。

①は米軍上陸まえ一回だけ実弾で合同演習を行つたことがあります。②は當時公表してはいけない秘密兵器でしたので、演習は当然村民を村内から出さず、峠には衛兵を立てて、厳しい監視の中で行われていました。

渡嘉敷、座間味、阿嘉で丸く囲んだ内海で全舟艇は二百五十キロの爆雷を抱えて、内海の中心に向つて全速力で三方から押し寄せ、敵艦に三〇度の角度で接近し、舟艇の先きが、敵艦に接触したと見るや、爆雷を投棄して、六〇度方向転回をして、即ち三〇度の角度を保ちながら遁走します。その後、四秒で爆発するので搭乗員は助かる算段は、充分にあるわけです。

赤松隊は百隻の舟艇を持ち、三つの中隊に分かれ、おのの渡嘉志久、阿波連に配備していました。

私は本部付の警戒小隊長で、出撃の時は私の舟艇が先頭を切ります。私の次に赤松隊長艇、そのあとに三中隊が横に広がつて続き、突撃の態勢にうつると、ぱーっと散兵して、目標に向うことになつていました。

当初は、舟艇は搭乗員もろとも「体當り」することになつていたのですが、むざむざ、搭乗員を殺すべきではないと、改められていました。

ました。一説には、演習風景を撮った映画を天皇陛下がご覧になつて、若い者を殺すな、といわれて、改められたと聞きました。さて私たちも、ただ一日きりの演習で、敵艦を待つていました。

#### 自沈した②

三月二十三日、早朝から始まつた空襲は二十四日、二十五日と続いて、激しさを増すばかりでした。二十五日駆逐艦を先頭にして、巡洋艦、潜水艦と二十隻ばかりの米艦が慶良間列島の内海に侵入して来ました。

その時、基地隊は「出撃準備せよ!」と各中隊に連絡していました。

搭乗員は、爆雷を点検したり、給油をしたりして、最後の調整に余念がありません。

夜に入つて、泛水作業が、軍民一体となつて行われました。水盆をかわし、基地隊は、重機を構えて、背後から援護射撃にそなえていました。

泛水も無事終わつて、先頭を切る私は、機関銃を抱えて、今か今かと、出撃命令を待つていました。

しかるに、その時、内海に居つたのは、哨戒艇一隻、他には何も見あたりません。このことは、隊長に私が報告しました。止むなく司令部へ敵艦の所在について、指示をおいでいました。返つて来たものは、「赤松隊は、本島に合流せよ」という命令でした。

氣の早い連中はモーターを回転させて今にも飛び出して行かんばかりです。行く者も、見送る者にも緊張の瞬間でした。

折から慶良間列島観察中、阿嘉から渡嘉敷に来ていた大町司令官

は、泛水を中止し、すみやかに揚水するよう、命令しました。

勇躍出撃しようとしていた隊員たちは、氣をそがれて畠然としていました。二五〇キロ爆雷のついた舟艇を海面から引きあげ、レベルにのせるだけで隊員たちは精根ついていました。

とうとうグラマンの飛びかう中に、その秘密兵器の姿をさらけ出してしまったのです。どうにか一部は壕の奥に隠し、揚水出来ない大多数は、破壊してしまわなければなりません。隊員たちは命令どおり、ピッケル状のもので船底に穴を開け、海底に沈めてしまいました。

私の部下の結城伍長は、出撃するといって聞きました。隊長の命令でも聞けないと、まさに飛び出さんとしていました。私は結城の舟に穴を開けました。彼は舟もろともごぼごぼ沈んでしました。海底で棍を握っている彼をひき上げたのは、やはり私の部下でした。

これで、我が隊の当面の目標「敵艦百隻撃沈」は遂げられぬままに、むなしく終つてしましました。目標を失つた若者たちは、酒を飲む他仕方がありませんでした。

二〇歳にも満たない若者たちは、よっぽど腹のすわった連中でした。二十三日の空襲は渡臺敷を徹底的にたたいていました。ちょうど部下を引きつれて、阿波連に状況視察に出ていた私ははいつくばつて一步も動けません。

私の軍刀と傍に居た部下の拳銃が、かちかち合つて鳴つているの

です。不思議に敵機の爆撃の中でもよく聞えました。私の体がふるえてとまらないのです。その部下が隊長殿、寒いのですが、「ばかた

れ、何が、……」と私は気ばかりでみせていました。

米軍は上陸していました。私たちは、あらかじめ設営していた西山陣地にひきあげました。

#### 集団自決のこと

西山陣地では電話も通ぜず各隊との連絡は容易ではありません。かるうじて各隊が集結していき、西山陣地の後方では、村民の自決が行われていました。

この子らは阿波連から恩納川に行き、西山陣地近くで、この子が手榴弾を発火させ、母親に投げたところ、赤児と母親の間におち、死んでしまったということでした。その自決場所には、妻子を殺したという男が半狂乱に、私に、自分はどうしても死ねないので斬ってくれと、わめいていました。この男も、姉弟も元気に居ります。

どうして、こういうことがおきたのか。その動機は、おそらく、数日まえ阿嘉が全滅し、村民は自決したときいて、いずれ自分たちもあのようになるんだと、きめていたに違ひありません。そこへ、米軍の迫撃砲です。山の中をさまよい、わいわい騒いでいるところへ、どかんと飛んで来たのがそれです。

もう生きられる望みを断たれたと、思つていたのです。それが自決をさせたと思います。しかし私が問題にするのは、十歳の少女がどうして手榴弾を手に入れたか、ということです。

たちは赤松隊長に、皇民として、捕虜になった君たちは、どのようにして、その汚名をつぐなうかと、折かんされ、死にますと答えて、立木に首をつって死んでしました。

少年たちは年が年ですから、戦争の恐ろしさも、軍規の厳しさも何も知らなかつたのでしょう。軍隊では当然利敵行為は許しません。村民が捕虜になつて、陣地や兵力に関する情報が敵に通じないという保証は出来ません。そういうことで私も人を斬りました。

#### 伊江島の女性を処刑する

伊江島の女性を私が処刑しました。伊江島の男女四人が、投降勧告文書を持って、陣地に近づき、捕えられ処刑されました。ところ

が、その中の女性一人が生き残つて逃げてしまつたのです。基地隊の西村大尉は私を呼びつけ、おまえが逃がしたのだろうというので、私は非常にしゃくでした。

今度は捕えたので來てくれといふので、行つてみると、女性は首を斬られて、頭がぐきりぐきりと小さざみにふるえていました。破傷風に罹っているのです。破傷風で死んだ高島少尉と同じ症状でした。

この女性はすっかり懶怠し、刀じゃなく銃でやつてくれといつていました。銃は敵に向けるべきものなのですが、私は自分の短銃で殺しました。

私はこの女性は以前から顔見知りでした。伊江島の人たち一千名が強制収容させられた四月下旬、私は決死隊として、収容所内に潜り込み、「知念少尉だ」と名乗り出たことがあります。その時の村

軍隊と村民との間

小さいこの島ですから、軍は軍、民は民というわけにはいきません。集団自決や米軍の攻撃で深い傷を負つた人たちが、米軍に救われ、回復して戻つて来ると、とたんに村民は、米軍に対する考へ方が変つて来たようでした。

村長や助役や郵便局長が、山から降りて、米軍に投降し、こんどは、村民を山から降ろすために、いろいろ宣撫工作をしていること今までなつていきました。

軍隊にとつては許しがたいことで、スペイ行為です。夜陰にまぎれて村民がぞろぞろ山を降りる情景が見られました。

そのような中で、米軍の捕虜になつて逃げ帰つた二人の少年が歩哨線で日本軍に捕えられ、本部につれられて来ていました。少年

民の狼狽の色は並たいていではありませんでした。

村民は私をかくまい食事一切の世話をしてくれました。昼は床下に、夜になると這い出して、情報の収集をしていました。私は世話をした中にその女性がいたのです。顔をよく憶えています。

私がやつたことは軍隊でやつたことで、命令に従つてやつたまでのことです。私は何もやましいものはない信じています。渡嘉敷の戦争に関する何冊かの本の中には、私に同情的で書かれているものがありますが、「やられたのは沖縄人、やつたのは日本軍」という考え方には賛成しません。

私は沖縄県人といつても赤松隊の一兵士です。

#### 朝鮮人について

知念

軍隊は作戦を遂行しただけです。やましいことは何もありません。

せん。むしろ沖縄県人の内部に問い合わせてみるべきではないでしょうか。私も云いたくないことがあります。云うと現存している人たちに迷惑がかかるかも知りません。

筆者 では地元に迷惑のかからない朝鮮人について。

知念 朝鮮人は陣中日記にもあるように、いち早く逃げ出し、米軍に投降しました。しかし中には、逃げ出しだが、米軍に投降しない者がいて、その連中は村民から物は盈んで喰うし、強姦はするし非常に危険な存在になっていました。

筆者 食糧を盈んだり、強姦事件もありましたか。

知念 村民からそのような報告を受けっていました。赤松隊長の命令で私は討伐隊を編成して搜索をしていました。村民の通報で

す。しかし捕虜になつて本島に渡る時、処刑した三人も焼死した七名も遺骨を持ち帰つて、阿嘉収容所で、朝鮮人に引き渡しました。

阿嘉収容所で朝鮮人グループが私を私刑にかけたことがありますたが、本部に居たといふ軍夫にかばわれ難を逃れました。私たちには、朝鮮人については、その姓名も知りません。ことばは通じなかつたし、立場は違うし、あまり関心もありませんでした。

#### 大城訓導の処刑

当時、渡嘉敷小学校の校長は戦後立法院議員になった宇久真成氏で、私の同郷の先輩です。びつこのために軍隊にとられなかつた崎田訓導は、私は付属小学校のクラスメートでした。そういう関係で大城訓導とは多少面識がありました。

昭和十九年十月頃、三十二軍の方針によつて赤松隊も現地から防衛隊を召集することになりました。「大城訓導も入隊すべし」という村民の強い意向で、やむなく入隊したようで、兵隊になるにはちょっと年をとりすぎているようでした。

大城訓導は同じく教師である夫人と女の子一人をつれて那覇から赴任したばかりで間借り生活をし、まだこの生活にもなんじんでないかつたといいます。身重の夫人と幼子をおいて、入隊することは不本意だったといいます。

戦争状態になると、土地も食糧の蓄えもない母子に、村の人たちが分け与えた生活をしていたといいます。それが続くはずはありません。妻子の窮状を聞いた訓導は、逃げて妻子のもとへ帰りました。三回逃亡しては捕えられ、とうとう処刑されてしまいました。

#### 山を下りる

八月十七日、米軍の投降勧告文書を持って陣地にやつて来た二人の男が処刑されました。この投降勧告文書について早速将校会議を開いて、私が軍使となつて、投降の交渉をすることになりました。私たちは二日まえ、ラジオで日本が無条件降伏したことは知つていました。

日本軍は実際は朝鮮人までいちいちかまっていられなかつたので朝鮮人は軍夫およそ二百四、五〇名、慰安婦六名が私たちが上陸まえからいました。鈴木大隊が引きあげたあと、軍夫は赤松隊が引きとり、各中隊に五、六〇名ずつ配置して使役していました。朝鮮人は米軍上陸あと自活隊を編成して食糧の自給自足をさせていましたが、投降してしまいました。

慰安所は今の小学校のすぐ向いにありました。雇主も朝鮮人でした。慰安婦の中には女学校を出たという、教養と品位の高い者が居りました。一回の遊び賃が一円五〇銭でした。一人は空襲で焼死しましたが、残り五名は、軍夫と同じ行動をとつたに違ひありません。日本軍はひそんではいる二人の朝鮮人を捕え、私は「おまえたちの名譽にかかわることは一切公表しない。靖国神社にも祀るから……」と説得して斬りました。よろこんで死にました。

村民の要請は村委会か常会かの決定によるものですか。

いちいち村委会か常会にかける間なんてありません。個人的なものでした。おそらく強盗も強姦もししかつたでしょう。

筆者 村民が殺してくれと要請したのですか。

知念 知念殺してくれとは云いません。しかし報告のとおりだと、軍規にふれますから殺さなければなりません。

筆者 殺された理由は何ですか。

知念 逃げた連中が畑を荒らしたことは事実です。私たちは何といつても村民の生命が大事ですしつつ……。

#### 集団自決とそのあと

渡嘉敷村阿波連

金城ナヘ

#### 集団自決

阿波連は、一日目の艦砲射撃で、焼け野が原になつていきました。アメリカ軍は、阿波連から上陸するので、早く渡嘉敷の山へ逃げるようになり、私は小さい息子二人をせかして、追いかけられるようにして、渡嘉敷に向つていきました。

大粒の雨が、私たちの行く手をさえぎつていましたが、今、目の前に浮いている山ののような黒い軍艦から鬼畜の如き米兵が、とび出して来て、男は殺し、女は辱しめるとと思うと、私は気も狂わんばかりに、渡嘉敷山へ、かけ登つていきました。

私たちが着いた時は、すでに渡嘉敷の人もいて、雑木林の中は、人いきれで、異様な雰囲気でした。上空には飛行機が飛び交い、こんな大勢の人なので、それと察知したのか、迫撃砲が、次第次第に、こちらに近づいてくるように、こだまする爆発音が、大きくな

つてきていました。

村長の音とて天皇陛下万才を唱和し、最後に別れの歌だといつて「君が代」をみんなで歌いました。自決はこの時始ましたのです。

防衛隊の配った手榴弾を、私は、見様見まねで、発火させました。しかし、いくら、うつたりたいたりしても、いっこうに発火しない。渡嘉敷の人のグルーフでは、盛んにどかどかんやっています。

迫撃砲は、すぐそこで爆発した。自決しようとしている人たちを殺していました。若い者が、私の手から手榴弾を奪いとって、パカパカくり返すのですが、私のときと同じです。

とうとう、この若者は、手榴弾を分解して粉をとり出し、皆に分けてパクパク食べてしました。私も火薬は大勢の人を殺すから、猛毒に違いないと思って食べたのですが、それでもだめでした。

私のそばで、若い娘が「渡嘉敷の人はみな死んだし、阿波連だけ生き残るのかー、誰か殺してー」とわめいていました。

その時、私には「殺してー」という声には何か、そうだ、そうだ、早く私も殺してくれと呼びたくなるように共感の気持でした。意地のある男のいる世帯は早く死んだようでした。私はこの時に生きて、はじめて、出征していく夫の顔を思い出しました。夫が居たら、ひと思いに私は死ねたのに、誰か殺してくれる人は居ないものかと左右に目をやった時です。

私の頭部に一撃、クワのような大きな刃物を打ち込み、続けざまに、顔といわず頭といわず……。目を開いて、私は私を殺す人を見ていたのですが、誰だったか、わかりません。そのあと死んでいったませんでした。

山全体が、雑木を少し残しているだけで、はげ山となっていました。私の目の前をアメリカの船が行ったり来たりしています、その度ごとに私は、エビのように小さくなつて、身を隠していました。そこへ五六名の日本兵がやって来て、口もきかずに、小さいにぎり飯一こ置いて、今来た道をすたすた去つてしましました。未だ生きている人たちがいたのだと、私は不思議なほど安心感がみなぎつきました。しかしおにぎりは、一粒でも、口に入れることは出来ませんでした。

私はまた眠り続けました。一昼夜寝ていたかも知りません。目を覚ました時、おにぎりはまだ左手ににぎられていました。私はふるい起つて、歩きはじめました。一つ山を越えては、そこで眠り目を覚ましてはまた歩く、何回かくり返しているうちに、とうとう阿波連の自分の壕に来ていました。

そこには親戚の者たちが居て、私を見て大変びっくりしていましたが、集団自決のことは知っていたのでしょうか。子供たちはどうしたのだと聞いていました。「死んだ」と答えると、子供を死なせて、なぜ生きているのかといい、私の傷の手当どころか、壕にも入れてくれないのです。

私の首は腐って、惡臭を発していましたので、親戚の人は私を壕の中に入れてくれなかつたのです。しかし私は食べ物も何もほしくありませんでした。そのようにして時間がたつに従つて、二人の子供のことや、いろいろなことが、頭によみがえつて来て、くやしさや、悲しさやで止めどもなく涙が流れました。

た私の義兄だつたかも知りません。私は、殺されて私の側に寝ている二人の息子に、雨がつばをかぶせました。

### 蘇生した私

土の臭いをかぐよう、うつぶせていた私は生きていました。あれからどれくらい時間がたつていただけでしょうか。土の臭いをかいでき生きかえったのです。しかし体は動きません。うつぶせのまま、手を動かしてみたり足を上げてみたりしていると、どうやら、首から上が自由はきかないのです。頭と身体とは別のもののようでした。

雨は、大降りではないがまだ降り続いている。ちょうど流れ落ちて来る水を左手で受けとめ、口に持つていつたのですが、口が開きません。

またしばらく、じーっとしていると、戦争は終ったのでしょうか。弾の音は一つも聞こえません。側に居た二人の息子は、そこにはいません。しかし、私は死んだ人たちの中に、ひとりでいましたが、恐いとも何とも思つていませんでした。

私はこの島には私ひとりが生き残って、他はみな死んだものと思つていました。私は早くシマに帰ろうと、残っているだけの力をふりしぼつて身を起してみました。側に居た息子はいません。点々と死体の上に目をやるのですがそれらしいのは見当りませんでした。

私の髪がほどかれて、ふところのものは、全部なくなつていました。こんな時に泥棒するものいるものだ。私は下へ下へと降りて行くと、ジーシップに面した海岸に出ていました。そこは渡嘉敷のちょうど反対側なので、私は、シマと逆の方向に向つていたわけでした。

阿波連の老人たちの中には、自決の日、雨の中を山道は歩けないので、部落に残っている人たちがいました。この老人たちは、米軍に保護され、部落に帰つて生活していました。ひょっとすると、自決の日、私たちとはぐれて姑も居るかも知らないと、部落に下りて来ると、老人だけの中に、姑はいました。

そのまま、私は阿波連に居付いていると、米兵が来て、私を舟にのせて、座間味へつれて行きそこの病院に入院させました。

そこには、私の他に、やはり自決未遂の患者が十四、五名いました。時々映画に撮られたり、記者らしい者もやって来て、珍らしそうに、私たちを見ていました。「カミカゼ」とか私の知つている言葉もいくつか出ていました。私の傷口は、彼らの興味の対象でしたので写真は何回撮られたでしょうか。

入院した時、米兵は、ちつともきたなさそうにもせず、私の体を熱湯で洗つたり、髪を刈つて丸坊主にしていました。私の傷は、背中と首と頭は、三ツ又鍼でやられ、顔は丸太ん棒でやつたようだともありません。口じゅう丸坊主になつましたが、歯という歯が一ヵ月、私たちには、再び阿波連に戻つて来ました。阿波連は、戦争の生活の続きでした。病院でのぜいたくな食事は夢を見ているようでした。

私の体は回復したとはいっても、そもそも私は未だ口が開けないし、足はよちよち歩きのままでした。それでも食糧を運んでくれる